

平成 22 年度 宇都宮大学 卒業論文

## 女子中学生の手紙文化について

教育学部 学校教育教員養成課程 教科教育コース 社会科教育専攻 4年

社会学研究室

071104X

大坪美紀

目次	1
はじめに	2
第1章 少女たちの手紙文化の歴史	2
第1節 「伝える」ための手紙	2
第2節 少女と手紙の歴史	3
第2章 なぜ「女子中学生」なのか	7
第1節 なぜ「中学生」なのか	7
第2節 なぜ「女性」なのか	9
第3節 「女子中学生」である意味	12
第3章 手紙を通して表現したいこと	13
第1節 人間らしさ	13
第2節 かわいくあること	15
第3節 自分らしさ	20
第4節 表現したいこと	25
第4章 実物の手紙からの考察	25
第1節 少女 S の場合	26
第2節 少女 M の場合	28
第3節 少女 A の場合	29
第4節 10年前の手紙のまとめ	30
第5章 手紙文化の変化（アンケートからの考察）	31
第1節 女子大学生へのアンケート結果	32
第2節 中学生へのアンケート結果	34
第3節 最近10年間の手紙文化の変化	36
第6章 本研究を通して	37
終わりに	38
参考文献	39

はじめに

私が中学生だった頃、明けても暮れても手紙を書いていた。手紙の内容はといえば今思えばなんてことのない、人間関係の愚痴であったり、片思い中の悩みであったり、日曜日の遊ぶ予定であったりと、真剣な悩み相談から会って話せばいいようなことまで、とにかく手紙にして書いて、交換し合っていた。この手紙文化は高校生になると急速に終息に向かっていったが、中学生の時期に見られる手紙文化の異常とも言える盛り上がりは、どうして起こったのか、という些細な疑問から今回の研究を始めようと考えた。

## 第1章 少女たちの手紙文化の歴史

そもそも手紙とは何なのか。国語辞典を開くと「用事などを書いて他人に送る文書。書簡。」と書いてある。一般的に手紙といわれるものは、相手の住所と郵便番号が書かれた封筒に入れられ、その封筒に切手を貼って郵便ポストに投函される。そして郵便局員の手によって相手の家のポストに入れられ、そのポストを相手が覗いて手紙の存在に気づき、手に取ることで初めて「手紙が届く」状態になる。手紙を受け取った方も、その手紙に対して同様の手法で返事をする。このように手紙のやり取りが一往復することで初めて「手紙交換」、「手紙のやり取り」と言えるようになる。この一連の流れの中で、手紙が相手に届くまでの時間や、ポストに投函するという手間、また切手代など微々たる額ではあるが費用がかかる。しかし、用事を直接伝えられることと、手書きの文字によって書き手の心遣いが伝わるという良さもあるため、今でも手紙というコミュニケーション・ツールが継続して存在している。

一方で、女子中学生の間で行われている「手紙交換」は、先にあげた手紙交換とは少し違っている。まず、相手は遠くに住んでいる人ではなく、近所の人や同じ学校の人、また塾が同じ人など普段の生活の中でいくらかでも会うことが容易な身近な友人であり、伝えたい用事の有無に関わらず、まるで会話しているような話し言葉と、絵文字や記号を多用して手紙が展開されていく。そしてその手紙を封筒に入れることもあるが、文字が書かれた便箋そのものをイチゴ型やハート型など好きな形に折って、授業の間の休み時間や朝、帰りの時間などに、手渡しで手紙交換、手紙のやり取りを行うのである。

### 第1節 「伝える」ための手紙

この女子中学生による「手紙交換」という文化は、「交換日記」文化と並行して、女子中

学生の中では昔から存在しているものである。日記とは、国語辞典によると「毎日の出来事や感想などを書いた記録」であり、本来一人で書いていくものである。その日記を、友人と交換しながら互いの出来事を書いていくのが交換日記である。手紙と交換日記は、コミュニケーションの媒体であるという点では共通する。両者の特徴として、意図的、無意図的に何がしかの意味において選択され、意識に鮮明となった出来事だけが文字化される、という点である。手紙や交換日記の文面から溢れ出すのは、綴る人にとって大事なこと、興味と関心の中心にあることであり、それはまた交換日記の「読み手となる者」との関係において選択された事柄、お互いの結びつきのために鍵とされている事柄である。一方で交換する目的が異なるという点で、手紙と交換日記は別のものである。交換日記は、互いの日々の出来事を記すことが主な目的であり、自分の記した事に対する相手の反応は、最悪無くてもかまわないのである。自分以外の他人に見られるという意識を一応持つてはいるが、記す内容は相手も共有できる話題の中で、自分の好きなことを好きなように書く。交換日記の目的は「伝える」ということではなく、出来事を「記す」ことである。

しかし、手紙は主に相手に「伝える」ことを目的とする。相手と共有できる話題の中で、例えば聞いてほしい悩みであったり、聞いてほしい嬉しかった出来事であったりという、「伝えたい」ことを記す。そして手紙を書いた者は、記しただけでは満足せず自分の手紙の内容に対する相手からの反応を期待する。交換日記とは異なり、手紙は「伝える、伝え合う」という目的があるため、コミュニケーションをとっているもしくは会話をしているというような意識の方が強い。また交換日記の場合、定められたノートの中でのみやりとりを行うが、手紙はどんな紙にでも文字を書いてしまえば「手紙」になるために、交換日記よりも表現できる側面が多くある、と言える。

では、女子中学生は「伝える」という目的を持つ手紙を通して、いったい何を表現し、何を伝えようとしているのか。まずは、女子中学生の間で行われている独特の習慣である「手紙交換」が、どのくらい昔からあったかということと、かつての13歳くらいの年頃の少女たちが、手紙交換を通して何を伝え合っていたのかについて述べていく。

## 第2節 少女と手紙の歴史

中学生くらいの年頃の少女たちによる手紙交換の歴史の始まりは、明治時代にまで遡るとみられる。そもそも「少女」という概念が生まれたのが、西洋の文明が日本に入ってきた明治時代である。それまで存在していたのは、性的に未成熟な幼女と、成熟した女性の2種類だけであった。この時代、1872年に学制が發布され、学校制度が整うまで学習する機関と言えば、読み書き算盤を教える寺子屋であった。もちろん13~14歳の少女と呼ばれる年頃の女の子も寺子屋に通ってはいたが、江戸末期・明治初期の女子の識字率は高くても4割で、最低限の読み書きができる程度であり、ごく限られた上流階級を除き、手紙を書い

て楽しむという状況であったとは考え難い。そのような中で、明治時代の学校教育制度とともに誕生したものが「少女」であるという（本田 1990）。明治時代の高等女学校という制度が「少女」を未来から切り離し、幼女と人妻の間の時間を生きる宙吊りの存在にし、加えて 1899 年の高等女学校令の後に創刊されたおびただしい数の少女雑誌がその「少女」のイメージを支えたとしている。また大塚（1989）も少女とは近代社会が産み落とした存在であるとしている。旧民法では 25 歳にならないと女性は自由に結婚ができなかった。少女はやがて妻として子どもを生産させられる運命にあるが、女の商品価値を高めるために学校で教育しようと囲い込むことでそれに「待った」をかけられた状態、つまり大人の身体をもちながら大人ではない存在、であったという。

このように学校教育制度の誕生とともに「少女」も誕生したわけだが、この少女たちのコミュニケーションの手本となったのが少女雑誌である。学校で文字や文を習い読み書きできるようになっただけでなく、文字や文を読み書きして「楽しむ」ような余裕が出てきた少女たちにとって、少女雑誌は文を楽しむ絶好の道具であったのである。その少女雑誌で人気を保っていたのが、明治後期の 1908 年創刊の『少女の友』という少女雑誌の友情小説である。なかでも雑誌『少女画報』に 8 年間もの間『花物語』を連載した吉屋信子は、『少女の友』編集主筆であった岩下小葉にくどかれ、『花物語』を踏襲した小説を『少女の友』に長期にわたって掲載していた。これらの友情小説に見られる少女同士の親密な関係は「エス」と表現されている。「エス」とは英語の〈Sister〉の頭文字をとったもので、手紙を交換したり、お揃いの髪型にしたりして上級生と下級生とが特別に仲良くなることを指す。ただし「エス」は親友同士とは異なり、必ず一方が庇護者である〈お姉さま〉となり、もう一方が守られる側の〈妹〉であること、一対一の関係が基本であった。「エス」関係にある少女は雑誌の中だけの話ではなく、現実存在していた。ここでコミュニケーション・ツールとして初めて「手紙」が登場するが、少女たちは雑誌を読んで受け手として文を楽しむだけでなく、自らも文を作ることで楽しむようになる。結果、現実世界でもこの「エス」同士である女学生はもちろんのこと、友達同士の間でも頻繁に手紙交換がなされるようになっていったようである。以下の手紙はその時代のものである。

おろかな T は遂 D 様の御許へ走つて仕舞つたのでした。何の考えもなく只苦るしまぎれに——K 様！ 何も御存知ないみ優しい K 様！

一言も申し上げずに D 様のみ胸に走つた子を御赦し下さいまし。

これは雑誌『少女画報』の「薔薇のたより」という読者投稿欄に掲載されたエスへの手紙である。雑誌の読者参加型のコーナーを通して、エスの関係を築くこともあったのでここで引用した。また女学生向けに手紙の文例集なども発行されていた。以下のものがその一例である。

御免して頂戴

吉子さん。仲直りしなくって？

やっぱり貴女が居なくちゃあかし、淋しくてやりきれないわ。今迄の事御免して頂戴ね。

どっちもいけないのだけど、あかしの方がたくさん悪かったわ。

あのね、吉子さん。

あかしじっとして居るのが退屈で仕方がないの、だからすぐに悪戯をして飛び廻るのよ。

吉子さんもちっとお転婆になりなさいな。二人で思いっきり、ちゃめさんになりましょよ。

怒っちゃ厭よ。わたしね貴女がはっきりとした動作をしてくれないと、心がムシャクシャするの。それですぐに怒っちゃうのよ。ほんとに怒っちゃ厭よ。これから二人とも、怒りっこなし。ね、いいでしょ、よく笑う子になりましょ。明日行ったら葉子の方から、おはようを言いますわね。それから仲直りの握手をしましょね。

きっと、さよなら。

このようなお手紙例文集や友情小説の手紙などから文体を学び、大正・昭和初期の女学生は自分が書くお手紙に反映し使用していたものと思われる。大正・昭和初期の少女たちの手紙文化、文字文化について今田（2007）は、少女たちは「少女」にまつわる実践を現実世界で行うことによって「少女」になっていくという。「少女」にまつわる実践の中で最も重要なことは文字を書くことで、手紙を書き、交換することが女学生の交際のルールであった。少女たちは手紙を書くことを通して「あわれなわたし」などと自己の存在に意味を与え、自己像を形成していた。それだけでなく、「おお、はかなく、よるべない日々」などと現実生活におけるあらゆる事象を解釈し、手紙の中に形成していた。そもそも手紙とは現実世界をそっくりそのまま写しとるものではなく、手紙を書くという作業は現実生活における断片的な事柄を一つひとつ結び付け、統一した意味を与えるものである。つまりエスは現実世界そのままでは成り立ち得ないものであり、エスは常に現実世界を文字によってドラマチックに作り替えなければいけない。そのため大正・昭和初期の女学生は手紙という手段によって、過剰な装飾語で現実世界を飾り、よりドラマチックな形に再構成し、また相手に対する思いを常に情熱的な形で吐露し合っていたのである。エスの少女同士はたとえ女学校などで毎日のように顔を合わせたとしても、交換する際には手紙をこっそり相手の靴箱にしよばせるのがお決まりで、その現場は誰かに見られてはならず、校内で相手と顔を合わせても素知らぬふりを通して文通することを前提条件として、日々の手紙交換をよりドラマチックに、秘密のここのように行っていたのである。さらに当時流行していた言葉遣いに、語尾に「～てよ」「～だわ」とつける「テヨダワ言葉」や、一人称を「ボク」二人称を「キミ」と呼ぶ「キミボク言葉」などが挙げられる。こういった言葉を使うことで、少女たちはよりロマンチックに現実を演出していたのだろう。

このように大正・昭和初期の女学生の手紙交換は、情熱的で華やかな表現を使用してやり

取りをしており、ロマンチックさを演出・表現していたことがわかる。この時代の少女たちに社会が理想として求めたことは、勉学に励むことなどではなく、「清く正しく美しく」をモットーとする、家事・育児をきちんとこなせる女性になる準備をすることであった。しかし、実際の少女たちがそのように理想的に育ったわけではなく、理想と現実には大きなギャップがあった。現実の少女たちは、いずれ嫁いでいき、妻として、母としてしっかりと役割を果たしながら生きていかなければならない。そのように社会化される前の女学生時代の数年間だけが、少女たちに許された自由な時間であり、そこで自由にふるまうことは、大人たちも暗黙のこととして理解していた。そのために社会からは一時的に隔離された女学校という舞台で、少女独特の文化が自由に形成され始めたのである。また男女で社会的に求められる役割が異なり、性差別があったこの時代では、男性との異性愛関係に相手を唯一無二の存在とすること、助け合い、全受容をお互いに求めることは困難であったことが推測される。しかし女学生のエスという関係の場合はそれが当然の前提としてあり、相手の全てを受け入れるというルールのもとに、少女同士はエスという関係を築き、同性愛とも言えるような情熱的で華美な言葉で飾った手紙のやり取りをしていたのである。

その時代から 80 年近くたった今も尚、中学生くらいの年頃の少女たちの間には「手紙」という文化が存在する。ただし、内容や言葉遣い、友人同士の関係性は、この時代のもので変わってきている。大正・昭和初期の友人関係は先述したとおり、非常に密なものであった。自由に振る舞える最初で最後の機会は、女学生時代の数年間である。この期間は、「大人になるまでは遊ばせて」と言わんばかりに、自由に振る舞う。ロマンチックな友情小説を好み、宝塚のスターにときめき、エス同士で華美な言葉を並べた手紙を贈り合うなど、現実の友人との関係性も含めて、少女たちは一種の現実逃避とも言えるような行動をとる。当時は現実逃避する手段が少なかったために、例えば手紙交換など、女学生たちの興味が一つのものに集中してしまう傾向があった。しかし、現在は自由に振る舞える期間が延びた。高校を卒業する 18 歳まで、また大学 4 年が終わる 22 歳頃まで、社会の組織に組み込まれず、社会的な責任を負わないままある程度自由に振る舞うことが許される。このように大人になるまでの期間が延びたことで、「今遊んでおかなければいけない」と焦って現実逃避をするようなことがなくなってきたのである。また、現在では中学生でもたくさんの情報を得られるほど、情報が溢れる社会になっている。そのため、自分の興味のあることをたくさんのものの中から見つけることができ、かつてはエスや友情小説などいくつかのものにしか集中しなかった現実逃避のパワーを、分散させることができる。例えば、男性アイドルに熱を上げたり、コスプレを楽しんだり、マンガを読みふけったりと、あらゆる方向にパワーを向けることで、学校の友人に自分のパワー全てをぶつけることがなくなった。そのため女子中学生くらいの年頃の少女の友人関係は、大正・昭和時代のそれよりも密度が低い関係に変化したのではないかと考えられる。

このように友人との関係性が変化してきたことで、手紙の内容も大正・昭和初期のもののように、情熱的で華美な言葉を綴るのではなく、すこしずつ冷静なものへと変化してき

た。しかし変化はあるものの、携帯電話が普及して便利なコミュニケーション・ツールがたくさんある現代でも変わらず、手紙交換という古風なコミュニケーション手段は残っている。「手紙交換」の溢れ出す感情を吐露する場としての本質的な機能や、手紙を通して自己像やアイデンティティを作り上げていくこと、また手紙交換を通して抑圧的な時代の雰囲気や規則に反抗することなどは、80年くらい前から共通している点であり、中学生くらいの年齢の女の子にとっては友人関係を築き深めていくうえで「手紙」という存在は重要なものであるといえる。

## 第2章 なぜ「女子中学生」なのか

前章でも述べたように手紙交換は昔から、女学生、女子中学生が主に行っているものと述べてきた。手紙交換は中学生から流行が始まり、勢いは衰えるものの、高校生の間も手紙交換は続いていく。また女子中学生にとってもう一つのコミュニケーション・ツールである日記は、小学校高学年のころから流行し出し、中学校を卒業するころには勢いは大方終息に向かっている。手紙も、小学校高学年から高校生に至るまで、女子のコミュニケーション・ツールとなっているのだが、最も激しくやり取りする時期は共に中学生時代であるといえる。ではなぜ、小学生でもなく高校生でもなく、中学生という特定の時期に、そして男子ではなく女子に、手紙ブームが到来し、大流行するのだろうか。本章では「女子中学生」と「手紙」の因果関係について、述べていく。

### 第1節 なぜ「中学生」なのか

中学生という時期は、精神的にも環境的にも大きく変化する時期である。人生の中でも第二反抗期であり、エリクソンの発達課題においても、中学生の時期に求められているものは、アイデンティティの確立であり、中学生時代は自我の確立と、他者性の獲得が課題とされている。アイデンティティが確立するまで、つまり揺らがない自分が確立するまで、さまざまな感情が混在して自分の考えや感情が大きく揺れ動く。みんなと同じはずなのに、平和な一体感から自分を追い出し、孤独な個としてはみ出させようと画策する内なる自己と格闘する一方で、同類でありつつも個々別々の存在でありたく、それでも、まだ一体となって群れてもいたいという矛盾した思いを持つ。この年頃の特徴は、大人からみてささいな、全く取るに足りないようなことが、彼らにとってはしばしば大きな関心事であるところである。さまざまな不安、疑問、不満、悲しみ、感激といった感情を表現したり、さまざまな情報を交換したりしていく中で、彼らは自己を確認したり、友だちと気持ちをわ

かり合う術を身につけたり、人間関係の機微に触れたりしていく。その過程で互いの感情を激しくぶつけあい、語り合い、自己を確認し肯定していくことでアイデンティティが確立していくのである（村瀬 1984）。

またこの時期は、アイデンティティが確固たるものとして存在していないために、非常に多感な時期となる。たとえば、オシャレをし始めたり、大人や異性の前ではモジモジしたりするなど、自分が他人からどう見られるか、に敏感になりはじめる。人の褒める言葉も嘲りと受け取るように、他人からの評価が気になり出すと事実とは全く正反対の意味づけをしてしまう恐れも出てくる。また人からの評価同様、自分自身も他人や周囲を評価するようになる。批判力や語彙力も伸びてきて、自分の思い通りにいかないことに対する不平不満があふれ出す時期でもある。

さらに、小学校から中学校へ移るときに彼らを取り巻く環境が大きく変化する。複数の小学校から集められた同級生の中で、新しく友人関係を構築していかなければならないことは精神的な負担となる。また部活動などのたった 1 つ、2 つ学年が違うだけの者に敬語を使い、たとえ遠くにいても元気にあいさつをしなければならない、先輩から見て生意気に見えないように振る舞うなど、先輩後輩という厳格な上下関係を初めて目の当たりにする。教師との関係も変化する。児童との親和的なコミュニケーションを大切にするような小学校の教師から、部活動や勉強、生徒指導に力を入れ、仲良く過ごすというより生徒を文字通り“指導”していくような教師が、中学校になると主になる。そして小学校のときより授業が進むスピードが速まり、年に数回の定期テストに重きがおかれ、学年の中で自分がどのくらい勉強ができるのかということが、明確に順位付けされてしまう。このように何もかもが今までとは違う環境に変化していく中学生の時期には、彼らが絶対のものとして信じ切っていた世界が、果たして真にその名に値するのだろうか、さまざまな疑いが生じてくる。ただでさえ中学生という時期は精神的に成長過程であり多感で難しい時期であるのに加えて、環境までこのように大きく変わってしまうので、浮かんでくるさまざまな感情を一つひとつ整理して、うまく受け入れていく必要がある。

では中学生は、思春期のさまざまな悩みや葛藤をどのように自分の中で消化していくのか。まずうまく消化できない時には、たとえばアイデンティティの揺らぎに起因する不定愁訴が起きたりする。医学的な裏付けはないのに体調不良を訴える者が出てくるのである。また引きこもってしまったり、学校に登校できなくなったりしてしまう。さらに、不良グループに仲間入りし、ぐれていってしまうこともある。しかし、自分で自分の中に渦巻くさまざまな葛藤や悩みを消化しようとするとき、自分の感情や考えを色々な手段で表現していこうとする。女子中学生が直接的に自分の中の葛藤や悩みを消化しようとしてとる方法としては、友人と語り合うことが挙げられる。直接顔を見て語り合ったり、長電話をしたり、交換日記をしたり、手紙を交換したりして、友人とのコミュニケーションを図るのである。小学校高学年から中学生の時期を指して、アメリカではテレフォン・エイジと言う（村瀬 1984）。毎日学校で会っている友人と、さしたる用事もないのに、とりとめもない

会話を 30 分も 1 時間もする。これはアメリカの子どもだけでなく、日本の子どもにも同じことが言えるだろう。友人とコミュニケーションをとり、日々変わっていく自分自身への戸惑いや悩みや葛藤を伝えあうことで、こんなに変化している自分は異常ではなく、みんなも同じように悩んでいるのだと確認し、自分を受け入れてくれる存在を実感する。また他人との関わりの中で他人のいい部分も悪い部分も受け入れて、お互いが気持ちよく生活できるように、社会化していく。その過程で溢れ出す不安な気持ちを吐露したい、話したいという願望が強まり、それを表現する方法の一つとして女子中学生が昔から選び取ってきたものが、手紙である。授業中に直接対峙して話すことはできないし、携帯電話を持っているか否かに左右されるメールというコミュニケーション・ツールは、周囲の友だち全員が楽しめるものとは言い切れない。電話でのコミュニケーションを楽しめるかということもまた、自らの携帯電話の有無に関わるし、家の電話を使用しても長電話をしすぎると親に怒られるという可能性がある。女子中学生にとって、いつでも、どんな相手とも、どんなに長い時間でも、周りを気にせずコミュニケーションを取ることができるもの、それが「手紙」であり、これこそが「手紙」が選ばれる理由なのである。女子中学生は「手紙交換」を通して、思春期の変化し続ける自分を表現し、自分を受け入れてくれる相手を探そうとしており、そこで交わされる手紙とは、自分のアイデンティティの確立をサポートするものとして重要なものと言える。

以上のように、中学生という思春期の多感で複雑な時期だからこそ、友人に自分のことを伝え合う手段としての手紙が流行するのだろう。

## 第 2 節 なぜ「女性」なのか

一般に女性は男性に比べ、おしゃべりであり、嗜好きだと考えられている。女が三人寄れば姦しいという形容詞もあるし、井戸端会議なんて言葉もあるほど、女性が集まればおしゃべりに花が咲くものである。一方で男性は、女性に比べるとおしゃべりのイメージはあまりなく、女性のように集まってはペチャクチャと話し込む姿はさほど見かけない。

この違いは何なのか。その原因は実は、脳のつくりが男女で異なるからであるという（坂東 功刀 1997）。大脳の言語中枢に関する実験で、米国のイエール大学のシェイウイツ博士らが、右手利きの男女 19 人ずつに文字や文章を読ませながら核磁気共鳴映像装置 (MRI) により大脳の画像をとらえたところ、男性では左半球だけが活動していたのに比べ、女性では左右両半球が活動していることがわかったのである。これは、大脳における言語情報処理の場所や仕方に性差があることを実証した重要な所見である。このような事実は、たとえば左脳に起きた脳卒中で言語障害に陥った後のリハビリテーションによる回復が一般に女性の方が男性よりもずっと早いということの理由づけになると思われる。また女性の脳梁が男性のそれよりも大きい（広い）という事実も、女性では言語機能が左右両半球で

統御されているということと関係があるだろう。また一般に女子は男子より早期に話ができるようになる。そして、幼児期の語彙数も女子の方が男子に比べ概して豊富である。外国語や歌唱の習得能力に関しても、男子より女子の方が一般に優れている。これらの性差の背景には、多かれ少なかれ脳のとくに言語中枢の構造や機能の性差が存在すると見るべきである。またヒトで最も発達し、外部からの情報を分析、統合、蓄積する役目を持ち、知覚、認識、記憶の中心部分といってよい連合野が存在する、大脳新皮質の脳葉と呼ばれる四つの部分がある。この左右の大脳新皮質連合野からの神経線維が交差している部分を脳梁というが、男女の形態差が見られる脳梁後部の膨大部は、後頭葉および側頭葉後部の連合野からの線維が主として交差しており、後頭葉および側頭葉後部は、おのおの視覚情報および聴覚情報処理を分業している部分である。そのため、視覚や聴覚情報を交換する回線が、女性のほうが男性と比べて多く視聴覚情報処理の仕方に男女で違いがあるとも解釈される。現在までのところ、脳梁の大きさと脳梁で交差する神経線維数との間の比例関係は、データ的には証明されていないが、女性が意識しなくても、きめ細かくものを見ることができ、あるいは言語能力が男より優れているといわれるのは、このためかもしれないという。

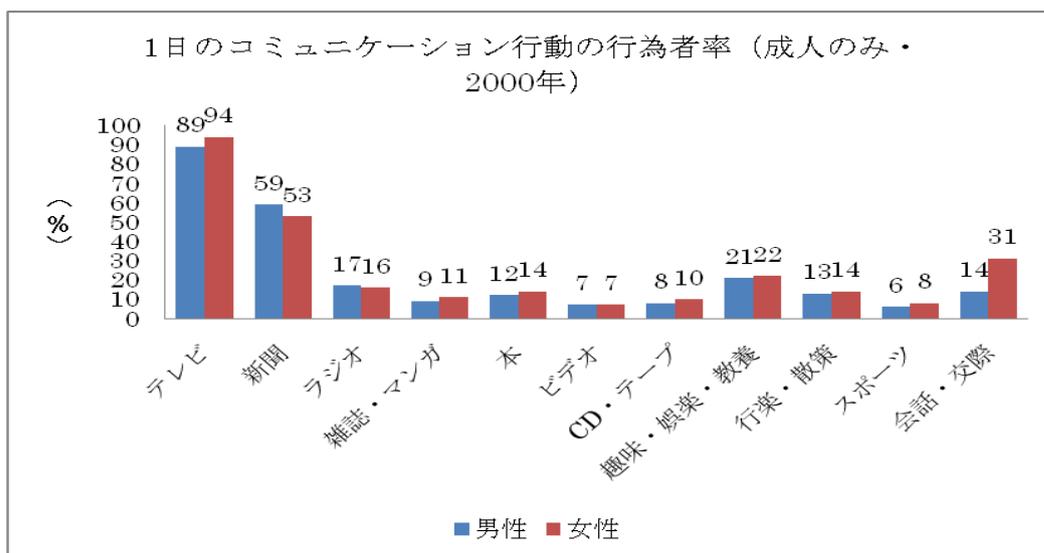
また、ブローカ領域のある前頭連合野は、意志のみならず感情をもつくる脳部であり、辺縁系一視床下部による情動の形成、情動行動の調節も行っているのだが、実際にこの情動に駆動される発語が意志に基づく以外にある、と考えても間違いではないであろう。前頭前野は前頭連合野に含まれ、特に左側はブローカ領域のあるところであるのだが、強い情動がブローカ領域の活動を高める可能性があるということも M・ジョージらの観察は示しており、さらに女性では男性よりもこのようにして発話が起ることが多い可能性があることをも示している。想像するに、このようにして起こるおしゃべりは、冷静に作文しながら行われる話に比べ、文法的に間違いがあるかもしれないが、迫力はあるだろう。これが女性の脳のおしゃべりの本体であるかもしれない。また、社会学者の江原由美子が男女大学生を対象に行った調査結果から、男性に比べて女性は反応が早く、相手が話した後、間をおかずにしゃべるケースが多いことが分かっているが、そこから女性はおしゃべりと見られる一因となっていると考えられる(坂東 功刀 1997)。さらに、一般的に女性は相手の感情を声の調子や表現で感じ取ることが巧みであるが、男性は一般に相手の感情に対して女性ほど敏感ではないようである(坂東 功刀 1997)。このようなことから、脳のつくりにも性差があり、女性の脳は男性の脳に比べ言語能力に優れ、きめ細かく情報を読み取ることができる、また感情に任せた発言もしやすい、という特徴がある。

またコミュニケーションに関するデータを見てみると(図1参照)、平日のコミュニケーション行動において、女性の94%がテレビ、53%が新聞に接触しており、会話・交際している人は31%であった。男性のテレビ接触は89%で女性よりもやや少なく、新聞接触は59%と女性よりもやや多い。会話・交際の男性の行為者率は14%で女性の半数以下であった。新聞とラジオを除けば、ほとんどのコミュニケーション行動で女性のほうが高めの傾

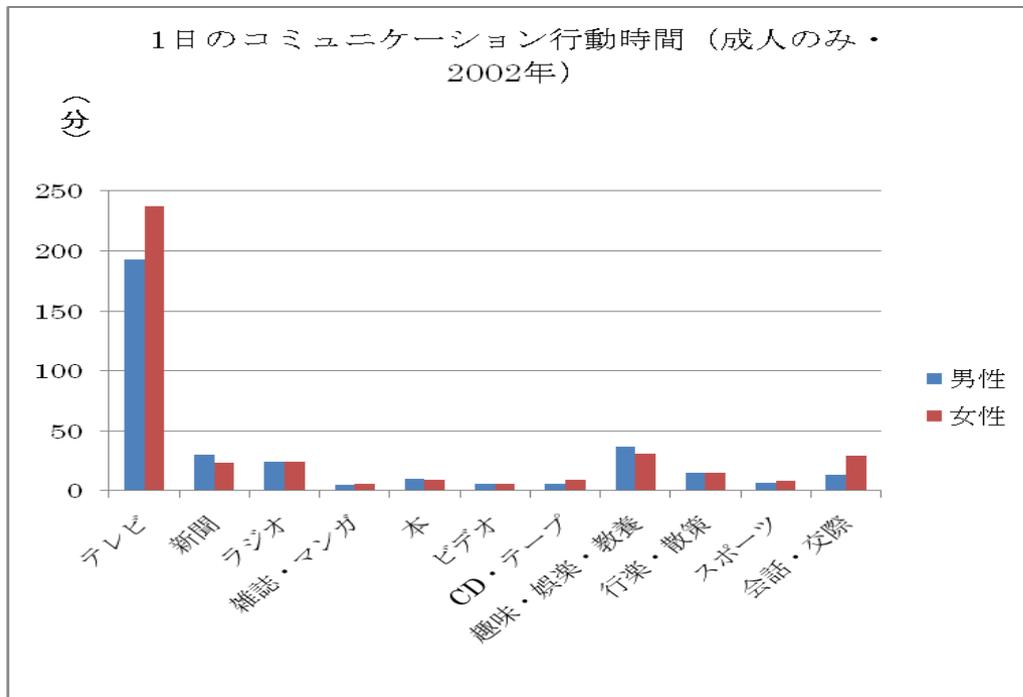
向がみられる。同様の傾向は、(図2参照) 平日のコミュニケーション行動の時間量にも表れており、テレビ接触時間(3時間57分)、会話・交際時間(29分)で女性の方が男性よりも長い。これらのデータから男性に比べて女性のほうが、コミュニケーションをとりたがっている、またコミュニケーションをとることを好んでいる、と言える。

以上のように、脳のつくりや根本的な部分で男性よりも女性のほうが、おしゃべりに優れているためおしゃべりを好んでいるといえる。ここで中学生の手紙の話に戻るが、女子中学生の手紙交換というものも、おしゃべりというコミュニケーションの一種である。手紙を通して授業中に会話をしているし、休み時間に渡しあう手紙も会話の一部と化している。女子中学生にとって手紙は、会話を具現化しているようなものであり、コミュニケーションを取ることが好きという特徴を持つ女性だからこそ、手紙交換という文化が流行するのだろう。

▼図1



▼図2



### 第3節「女子中学生」である意味

前節までに見てきたように、中学生という時期は、感受性が豊かで、自己表現していきたい、揺らがない自分を形成していきたいと、学校という組織の中で精一杯アイデンティティの確立に向かっている時期である。また人間の女性という生き物は、生まれながらに言語能力に優れ、かつ感情に任せて発話する傾向にあるため、よくしゃべる、またおしゃべりが好きという傾向を持つ。このどちらも兼ね備えているのが女子中学生である。おしゃべりが好きだから、友人に話したいことがたくさんあるから、女子中学生はおしゃべりを始める。ただし学校生活を送っている以上、授業中は勉強するし、給食のときや清掃のときに会話をするにしても、事務的に定められたメンバーでするしかない。女子中学生も、好きなおしゃべりばかりをしていられるわけではないのである。そのため、好きな時に好きなだけ書いて、疑似おしゃべりを楽しむことができるのが「手紙交換」である。返事のスピードは会話に比べて格段に遅くはなるが、今日の出来事や感想などの話したいことを確実に友人に伝えることができ、おしゃべりしたいという女性的欲求も、ころころと変わる感情を表現したいという中学生的欲求も満たすことができる。このような理由により手紙交換が「女子中学生」という時期に最も繁栄期を迎えるのである。

### 第3章 手紙を通して表現したいこと

女子中学生くらいの年頃の少女たちは100年近く前から相も変わらず、手紙交換というコミュニケーション・ツールを利用している。かつての女学生であった少女たちは、先述したように「手紙交換」によってロマンチックさを演出・表現し、現実逃避していた。だが、現在は時代が変わり少女たちを取りまく環境は変化した。自由に振る舞うことができる期間は長くなり、趣味の多様化により手紙以外のものに情熱を傾けることができるようになった。それでも手紙交換という文化は存在する。そこで現代の女子中学生は手紙を交換することによって、何を示そうとし、何を望んでいるのか。手紙を交換するという作業は書く、渡す、読む、返事を書く、渡す、読む、で一つの流れである。その中で、文字、文体、折り方、手紙の中で取り上げる話題、渡し方、など一つひとつの側面から丁寧に読み取って、何を示そうとしているのかを分析することにする。ただし手紙による示し方には3パターンある。まず、意識の中に「示そう」という意思があって示す場合、次に無意識に「こうしたい」「こういう風に見られたい」などの意識があってそれが自然に出てしまった場合、三つ目は根本の性質がそうであるがゆえに意識的無意識的に関わらず示してしまっている場合、とがある。この三つ目の例としては、前章の「女性らしさ」「中学生らしさ」が挙げられる。女性らしい性質と、中学生らしい性質は意識して示しているわけでもなく、無意識に示したいと思っているわけでもなく、女性だから、中学生だから、女性らしさと中学生らしさが示されたのである。では女子中学生は手紙を通して、一つ目と二つ目の場合のように意識的に、もしくは無意識的に何を表現したいのだろうか。ここでは「人間らしさ」「かわいくあること」「自分らしさ」の3つを取り上げて、述べていく。

#### 第1節 人間らしさ

人間というものは、自分を囲う枠があれば突き破って飛び出してみたくなるし、規則があれば破ってみたいものである。集団を統制する場合、規則を作ることによって集団内の秩序が成り立つが、集団がその規則を必ずしもきちんと守っているとは言い難い。中学校という場所はそのいい例である。少なくとも私自身が中学生だった頃はマンガやお菓子、ゲーム機、携帯電話を持つてくることは基本的に禁止されていたし、まゆ毛を整えたり、髪に縮毛矯正をかけたり、制服のスカートの丈を短くしたり、ジャージを腰で穿いたりすることも禁止されていた。中学校の校則はあくまで「中学生らしい生活を送るための規則」であり、そのような生活において余計な物の持ち込みは禁止しているし、中学生らしからぬ格好をすることも禁止しているのである。さらに、人間関係のトラブルのもとに

なるから、という理由で校則にはなっていなかったが、手紙交換をすることはたとえ休み時間であっても私の通っていた学校では禁止されていた。他の学校でも少なくとも授業中の手紙交換は認められていなかったであろう。ここで、禁止されているにもかかわらず、お菓子を学校に持ち込んだり、髪を染めたり、授業中に先生に隠れて手紙を渡しあったりしてしまうことは、その集団を統制するための規則に対する反抗心を象徴していると考えられる。ここで、社会学者ゴフマンの第二次的調整の理論を引用して説明していく。(ゴフマン 1984)

まず、調整には第一次調整と第二次調整がある。第一次的調整とは、『彼がそうあるように予定されている存在容態に過不足ない在り様をするように公式に要求されていること、さらに彼と事実上親和的な世界に住むことを余儀なくされていること』である。つまり、学校生活において言えば、授業中は黙々と勉強にいそしみ、部活動には情熱をもって取り組む、という本来こうあるべきという中学生の生活を実行することである。一方の第二次的調整とは、『特定の組織内の個人が非公認の手段を用いるか、あるいは非公認の目的を達するか、あるいは双方を同時にするかして、彼の為すべきこと、得るべきもの、かくして彼の本来の存在様態とされているものをめぐる組織の非明示的仮定を回避すること、すなわち施設が個人に対して自明としている役割や自己から彼が距離を置く際に用いる様々の手立て』のことである。つまり第二次的調整とは、授業中にマンガを読んだり、居眠りをしたり、手紙交換をしたりするなど、人目に付くように遂行することは積極的に禁じられているけれど、見つからなければ行っても大丈夫、というようなことを行うことである。

組織内において規則を破り、それが管理者にバレなければその行動を続けることができる状況は犯罪者のそれに似ている。従来、犯罪学者の言によれば、規則を破りたいという積極的欲求が生まれ、また贈賄のように体裁だけを整えて巧みに規則を破るようになるのは、規則があるからこそであるという。そして規則を破りたいという積極的欲求を満足させるために人は、あれこれ考えて、その欲求を満足させる手立てを創出していくのである。

さらに、集団で第二次的調整といえる行動をとることは、当局者に挑戦する一種のゲーム状況を提供しているということである。そこで現に行われている関係のいくつかは、一つには参加者がそれらの関係を維持している「からくり」を楽しんでいるからこそ成立しており、規則のある組織において、相棒同士が互いに相手に教えてやって助け合うのは当然のことであるという。たとえば学校を例にするとすれば、先生にばれるかばれないかのギリギリの状況で授業中にマンガを読み、手紙を書き、先生が机間指導を始めた時に、隣の席の居眠りしている生徒を起こしてやったり、マンガを読んだり手紙を書いている生徒に先生が近くに来ることを教えてやったりする、などして協力することである。

第二次的調整は、空虚な生活に楽しみを見出したいという、管理される側、規則に縛られている側の人間らしい、ささやかな反抗心であり願望である。積極性が期待されているのに無関心が、忠誠が期待されているのに反抗的態度が、出席が期待されているのに常習的欠勤が、活発さが期待されているのに気だるさが、行動があるべきところに多様な形の

無為が、存在する。無数のありふれた曰く因縁があつて、それぞれの曰く因縁はそれなりに自由を求める運動であり、そこに楽しみを見出す時、第二次的調整となる。

また組織に反抗したいという欲求は、人生における他の時期に比べ、悪ぶることをかっこよしとする中学生の時期に高まる。中学生時代は第二次反抗期にあたり、大人を出し抜きたい、どんな形であれ自分の存在を認めてもらいたいという欲求があるため、学校の規則を巧妙に破ることやその裏をかくこと、また教師をからかうことに情熱を傾ける。中学生の間で大人に反抗することを「かっこいい」とする概念が浸透していることも、この時期の特徴である。教師を出し抜くゲームは、級友たちとの連帯に基づく暗黙の合意を得ており、教師をからかう仕方にも一定のルールがあり、誰が犯人かわからぬように巧妙に、しかもできればある種エスプリもしくはユーモアを感じさせるやり方で教師を攻撃しなければならないという理解があつた。さらに中学生の「反抗したい」という衝動は、学校や家で教師や親に対して反抗する行動に出るだけではない。学校の校則を破ることから、自転車の二人乗りをしたり万引きをしたりなどの社会的な法律を破ることまで、社会的な禁を無視して自己中心的にふるまいたい衝動に駆られるという不思議な無謀さも持っている。

以上のことから第二次的調整は、組織を管理する側の「組織の秩序を保ちたいし、秩序を保っているということを示したい」という思いと、組織の一員として管理される側の「規則に縛られた生活の中に楽しみを見出したい」という思いの中間に、ちょうどいい妥協点として成り立っているものである。そして女子中学生の手紙交換を第二次的調整にあてはめると、女子中学生は手紙交換というものを通して、学校の規則への反抗心をゲーム感覚で楽しみながら示そうとしていると言える。そこには中学生の時期により強まる自立したいという心や、規則に縛られるだけでなく自分らしく振舞いたいという人間としてのプライドもある。このような人間らしい反抗心を「授業中に手紙を書く」「授業中に手紙を回す」という行動を通して、女子中学生は示しているのである。

## 第2節 かわいくあること

「少女」という概念が定着してきた大正・昭和初期あたりから、中学生くらいの年頃の少女が築き上げた、独自の感覚に基づく文化はあつた。少女独自の感覚とは「かわいい」や「素敵」、などを基準にした感覚である。そのような文化が社会的に認知されるようになるのは1970年代になってからである。そこでまずは、少女の文化が社会的に認知され、どのような変遷を遂げてきたのかを説明していく。

第1章でも述べたように戦前には、雑誌『少女の友』や『少女画報』が爆発的に売れ、吉屋信子の友情小説や竹久夢二や松本かつぢの少女画が流行した。少女たちはエス同士での手紙のやり取りをする一方で、少女雑誌の投稿欄において全国の読者と私的な、時にエスの関係を結ぶほどのコミュニケーションを図っていた。このようなコミュニティを本田は

「少女幻想共同体」（1990）とした。これらは後に誕生する「かわいい共同体」の前身だと言える。このころは「かよわさ」が少女の象徴であり、それが少女たちにとっても基準となる考え方であった。しかし第二次世界大戦が始まると、少女たちに求められたことは「かよわさ」ではなく、「女らしさ」と「雄雄しさ」を同時に称揚するような少女像に変わってくる。（今田 2007）

第二次世界大戦、高度経済成長を経てようやく日本人の暮らしにも若干の余裕が出てきた 1960 年代に、石原慎太郎の『太陽の季節』（1955）に見られるように〈若者〉というものが社会的に発見される。ジーンズと T シャツを着て、エイト・ビートにのれる長髪の僕ら、というコード化されたシンボルの助けを借りて、「〈若者〉としての我々」という世代的な連帯意識をもった若者は、暴走や錯乱といった否定性を超えて、愛と平和に代表されるようなポジティブな自己主張を行うようになった。10 代の女の子たちも〈少女〉としてよりむしろ〈若者〉として自己規定するようになっていき、女の子たちを受け手とする文化も、こうした「若者文化」の一部として、最初は「友情」を、少し後には「純愛」という異性との関係を取り入れるようになった。このような文化の変化の中で、かつての「清く正しく美しく」という理想が消え、それに代わって「かわいさ」への志向が徐々に出現してくるのである。このころのかわいさというのは「ロマンチックなかわいさ」である。「ロマンチックなかわいさ」は「自分の世界のロマン化」として自閉・自足的であり、「〈私〉だけの世界」という内向きの理想的な思い入ればかりを志向する傾向にあった。しかし、60 年代の若者文化は、団塊世代が主役を演じた大学紛争の挫折の後、急速に衰退することになった。このころから「若者というもの」「自己というもの」「愛というもの」などあるべき自己、若者らしさから、「〈私〉らしい私」「〈私〉らしい幸せ」など「らしさの個人化」が追求されるようになる。

そして 1970 年代に少女文化のビッグバンが起こる。少女が消費社会の中心となるような「かわいいカルチャー」的少女文化が成長し、社会的に少女文化が認知されるようになったのである。そのきっかけとなったのが、ファンシーグッズの爆発的流行と、変体少女文字といういわゆるマンガ字、まる文字の登場であった。昭和 46 年、サンリオがファンシーショップの一号店を新宿に出店し、昭和 47 年にはソニークリエイティブプロダクツも参入した。サンリオはハローキティやパティ&ジミー、リトルツインスターというサンリオの文化の顔ともいえるキャラクターを、ソニークリエイティブプロダクツもタマ&フレンズやピングーなどのキャラクターを開発し、売り出していった。そしてそれらのキャラクターがプリントされた鉛筆、消しゴム、ノート、下敷き、メモ帳が売られ、少女たちはそれをこぞって購入した。授業用のノートでさえファンシーな絵柄入りのノートを使い、そこに「かわいい」まる文字で字を書きこみ、きれいにノートをまとめることにこだわった。このころの「かわいさ」は、60 年代の「ロマンチックなかわいさ」から「キュートなかわいさ」に変わっていた。「キュートなかわいさ」とは、「これってあたしっぽい」といった自己意識においてのみでなく、外向きの奔放なかわいさである。こうして少女文化が社会

において一気に花開いた時、社会では少女文化を「かわいいカルチャー」的少女文化とみなし、それを担う少女たちが「かわいい共同体」という同世代の共同体をつくり、あらゆるものを「かわいい」と呼び、また味気のないものをかわいいものに変化させている、ということを知った。(宮台、石原、大塚 1993)

こうして社会的にも認知されてきた「かわいい共同体」だが、その一員になることは、中学生くらいの年頃の少女たちにとってはステイタスなことであり、オシャレなこと、かっこいいこと、憧れることである。誰もが同じ化粧品で同じような化粧を施すことによって、同じ顔をして、お互いを仲間と認め合うように、ある時代にはある型の化粧品を誰もが使うことで、集団意識の秩序、安心感が醸し出され、少女たちはこぞって「かわいい共同体」の一員だと示そうとした。そこで少女たちが「自分はかわいい共同体の一員だ」ということを周囲に表現するために二つのものを利用した。家やその他の環境で「かわいく」振る舞うことはいくらかでも可能であるが、学校という、規則に縛られた環境の中で自己表現をするには、制服の着こなしや髪型、カバンや文房具、文字などの目で見えるもので表すことしかできない。

着こなしや髪型などは、ファッションということができる。「かわいい共同体」におけるファッションとは、みんな同じ制服を着て、同じような文房具を使って勉強するという色味のない生活を強いられる学校生活に、少女たちはオシャレさを求め始めたことである。結果的に地味な印象のある文房具にオシャレさ、かわいさを足したファンシーグッズが爆発的に少女たちに広まり、制服もかわいく着こなす術を身につけ、少女たちは「学校」という場所に「かわいい」という概念を持ち込んだのである。そして「かわいい」の基準は変わってきてはいるが、学校にオシャレさを持ち込むことは、今の少女たちにも継続していることである。一例として、90年代に女子高生の中で一世を風靡したギャルファッションが挙げられる。日焼けサロンで肌を小麦色に焼き、目の周りを縁取るように真黒にアイラインを引く、いわゆるガングロ、ゴングロメイクをする。制服のスカートはぎりぎりまで短くし、靴下はダボダボのルーズソックスを履く。髪は茶色や金色に染め、一部には唇を白く塗りヤマンバのような出で立ちの少女、通称「ヤマンバギャル」まで登場するようになる。これは、まさしく同世代の少女の中の価値観でしか理解し得ないようなファッションであり、「かわいさ」である。ギャルファッションの主な担い手は高校生ではあったが、2000年代初頭に中学生だった私や同じ中学校の女子もルーズソックスに似た素材の靴下を履いてみたり、スカートを短くしたりするなどして、同じ「かわいい」という価値観のもとギャルファッションを似せようとしていた。そして2011年になった現在では、「かわいい」というファッションの感覚がまた変わってきているようである。私の母校の制服を着た女子中学生を見ると、皆合わせたかのように、制服にくるぶし丈の靴下を履いて登校している。かつての「かわいい共同体」に属していた私が見ても、正直その「かわいさ」があまり分からないが、私の母校だけであつたとしても流行しているのだから、母校の女子中学生たちは制服にくるぶし丈靴下を合わせるファッションを「かわいく憧れるべきもの」

としているのだろう。またそのファッションをすることで、「かわいい共同体」の一員であることを周囲に示しているのだ。

ファッション以外で「かわいい共同体」の属性を示す方法の代表は文字である。変体少女文字という少女特有の観点から見て「かわいい」字を書くことで、自分が「かわいい共同体」に属しているのだと少女たちは示そうとした。もともと少女たちは猛然と文字を書く生活を送っていた。きれいに、まめにノートをとるのは現代の少女に限ったことではなく、ノート以外に手紙や交換日記など、猛然たる文字生活を送っているのが、今の少女たちである。授業中に手紙を書くことが日常化し、文体を考えるのではなく、話し言葉をそのまま文字にして書く、つまりおしゃべりの代わりに書く手紙にはかなりの速度が必要だったため、早く「かわいく」書ける文字という条件に合った変体少女文字が生まれた。変体少女文字は、はねるような明るさ、軽さ、そして装飾志向と強い幼稚性を持っているというのが特徴である。70年代前半に女の子によるまる文字が普及し始めたが、これは60年代的な「若者という共同性」が失われたことによるコミュニケーションの手がかりの喪失を、かわいい文字のやり取りが演出する幻想的な「かわいい共同体」によって埋め合わせるものだった(山根 1993)。こうして登場したまる文字であるが、少女の観点で「かわいい」と思えるような文字は変化していく。80年代末ころから、「まる文字の消失」と「ノッポ字の勃興」が起こる。ノッポ字とはたて長で角張った、繊細でありながら、どこか不安定な印象を与える字のことである。

これらの文字で書かれた日記や手紙に共通することは、感情をただの文字以外のものでも表しているということである。例えばエクスクラメーションマークを多用したり、星やハートや音符、汗が飛び散る絵や手を振る絵を文末につけたりすることで、その時の感情をより豊かに「かわいく」表現することができる。また、英語やローマ字を多用したり、漢字で書くところを敢えてひらがなで書いたりもしている。他にも、クエスチョンマークが変形を進めたり、新しい記号まで登場したりと文字化しており、独創としか言いようのない絵文字が増えている。これらは、話し言葉の書き言葉化現象とも受け取れるし、漢字使用率の低下による読みにくさを補い、分ち書き効果を高めるための手段とも思われる。そして何よりそういった絵文字を使ったほうが「かわいい」文面になり、英語を使ったほうがカッコよく、おしゃれに見えるのである。

こうしてかわいい文字をかわいい絵文字でサポートすることで、「かわいい」ノートや日記、手紙が書けるようになるわけだが、この変体少女文字自体が実は、少女たちの自己表現とコミュニケーションを示しているのである。変体少女文字は、誕生した当初はロマンチックなナルチシズム・ツールだった。70年代前半の丸文字が誕生したころの「乙女ちっく」を「かわいい」とする感覚の中で、「私だけがわかる〈私〉」が流行し画期的だとみなされた。それは前代である60年代の「〈我々〉すべてが目指すべき自己」という考えの中で、〈我々〉としての共通性、言い換えれば〈若者〉としての共通コードに、少女たちが違和感を感じ始めたからである。つまり「〈我々〉としてみんなはちゃんと恋愛できているの

に、私だけダメ」といった「不確かさ」の意識こそが、「私にしか分からない〈私〉」のナルチズムの中核を構成していったのである。しかしその後急速に一般化することで、まる文字はキュートなコミュニケーション・ツールと化した。そもそもまる文字は「不確かさ」の意識を抛り所とするナルチズムとして始まった定型であるので、まる文字を書く少女たちは表現の主体としての「内的確かさ」を欠いていた。実際、典型的なまる文字を使った表現は、筆跡を均一化するだけでなく、♡ や☆や「やっほー」「ではでは」などを多用する不思議な浮遊感覚を伴った定型的な文体は、表現を匿名化することで、文面から書き手の「内的確かさ」を探り当てられる可能性を消し去り、コミュニケーションを「かわいい共同体」の自動化されたゲームに変化させる。こうして少女たちは、「かわいいもの」が、主体なきコミュニケーションを可能にすることに気付いたため、対人関係の形式的なコードとしての「キュート」が発見された。少女たちは、「60年代サブカルチャー」の時代のような〈我々〉としての内容的な共通性の代わりに、コミュニケーションの形式的な同一性を当てにできるようになった。つまりまる文字によって「“かわいい共同体”のメンバーだ」というシグナルが送られると、お互いに平等な匿名メンバーとして「お約束の中で」振る舞えるようになることに少女たちが気付き、無内容であるがゆえに通用するようなキュートなコミュニケーションが、可能になったのである。対人関係のコードとしてのキュートな「かわいさ」とは、ある意味で、「子どもの」な仲間感覚に近いと言える。つまり、キュートな「かわいい」という概念は、愛らしさ・無邪気さ・明るさ・元気さなどへの、誰もが文脈自由に抱くはずの共感に依拠して、いつまでも戯れ続け、コミュニケーションを継続するための、また各人によっていかようにも異なりうる「本当の〈私〉」を詮索するのをやめにして、「みんな同じ」であること、「みんなかわいい共同体のメンバーだ」ということを、巧妙に先取りしてしまう対人関係の本質的機能なのである。こうしたことからまる文字は、「かわいい共同体」への強制的な参加を少女たちに促す「権力」を持ち始め、すべての少女を巻き込んでいった。それに並行して「かわいい共同体」の質も、「思春期的な幻想性」から「子どもっぽい無害さ」へと、誰もが平等に参加できるものへと敷居を下げていったのである。(宮台、石原、大塚 1993)

そして 80 年代末ころから、「まる文字の消失」と「ノッポ字の勃興」が起こる。ノッポ字は対人能力にすぐれたオシャレな女の子たちが書き始めたものである。彼女たちを出発点として、まる文字に象徴される幻想的な共同体をきらう新たな感受性が少女たちの中に上昇しはじめた。ノッポ字は、書き手が置かれている「かわいい共同体」のメンバーであるという関係性をいちいち表示するというまる文字の過剰さ、暑苦しさを取り去った、オシャレな差異化ツールとして立ち上がったものである。それはつまり、異なる場を生きる人々を架橋する疑似的な共同性を演出していた「まる文字」の時代から、際限なきロールプレイングによってその都度の場に適応する「ノッポ字」の時代が変わっていったということである。背景には、両方の作法の「性能の差」がある。同世代の「かわいい共同体」に属している少女だけにしかかわいさが伝わらない様なまる文字を利用すると、同性や同

世代のコミュニケーションで閉じてしまうが、「際限なきロールプレイング」は、親にも教師にも都市で出会う匿名者にも通用する作法となる(宮台 2006)。ノッポ字を書くことで少女たちは、積極的に「かわいい共同体」の一員であることを周りにアピールすることはなくなったが、暑苦しいことはカッコ悪い、冷めてることがカッコいい、オシャレという新しい共通概念が、少女たちの中に新しく浮上してきた。そしてその感覚を基準にした新たな「かわいい共同体」に変わってきたのである。このように何を「かわいい」「オシャレ」とするかは時代ごとに変化してきているが、少女たちは「かわいい共同体」で取り上げられる文字を書くことで、「かわいい共同体」への属性を積極的に表現しようとしているか否かに関わらず、知らず知らずのうちに、自分が同世代の少女だけにしか分からない様な「かわいい」という感覚を基準に生活しているのである。そしてそれは「かわいい共同体」に属していることを意味するのである。

以上のように女子中学生が、自分の属する集団内で「かわいい」とされる基準を満たすようなファッションをしたり、文字を書いたりすることは、女子中学生の「かわいい共同体」という集団内においてはステイタスなことであり、憧れるべきものである。この「かわいい共同体」に属していることを示すファッションと文字という二つのものを、どちらも兼ね備えて「かわいい共同体」への属性を示すことができるものがある。それが、女子中学生による「手紙」である。手紙による「かわいい共同体」への属性は、5つのものから(文字、文体、用紙やペン、折り方、内容)示すことができる。かわいい紙とペンを使って、かわいい文字を並べる。そしてファッションブルでかわいい絵文字を散りばめ、ファッションブルな折り方をする。この外から中までかわいくてオシャレな手紙は、かわいさがたくさん詰め込まれた「かわいい共同体」所属を示すいわば「証明書」のようなものである。手紙は集団内においてはお互いが同じ価値観を持っていることを示すようなコミュニケーション・ツールの役割を果たす一方で、女子中学生は集団外部の人間に対して手紙という目に見える形で明確に、「女子中学生らしいかわいさ」を示そうとしているのである。つまり、手紙を交換することは「かわいらしくあること」を示す手段と言える。

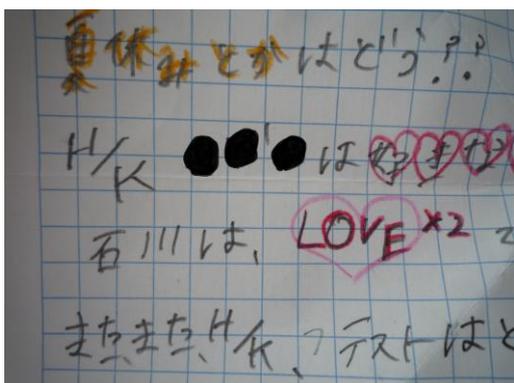
### 第3節 自分らしさ

人間には個性というものがある。性格も好きな食べ物も好きな色も、全てが全く一緒だという人間はどこにもいない。同じ制服を着て、同じ時間に同じことをするよう強いられている中学生にも、個性はある。しかし、校則によって格好や髪型の自由が奪われている中学生は、個性を出せる場所が限られている。それは例えば筆箱であったり、下敷きであったり、「手紙」であったりする。前節でかわいさを示す手紙の側面として文字、文体、用紙やペン、折り方、内容の5つを挙げたが、これらは個性を示す側面とも為りうる。

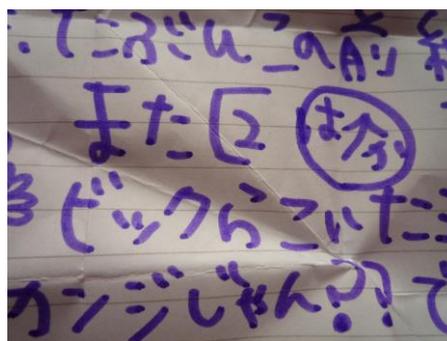
まず文字によって個性を表現できる。前節で述べたようなまる文字、ノッポ字や今でい

うギャル文字など、文字そのものの書き方でも個性を出せるが、文字だけでなく中高生特有の絵文字やマークをふんだんに使用して個性を出す。例えば DEAR や FROM などの変形したものや、大きい句読点、また絵文字や H/K（「話変わるけど」の意）など、少女たちが生み出した独特のマークなどがある。写真 1 を見ると「H/K」という文字がある。これは「Hanashi-Kawatte(話変わって)」の意味で、話題を変えるときに使うマークである。同じ意味で写真 2 の「はか」という表現や、英語で書く「S/C (Story-change)」という表現もある。また写真 2 の「また[2]」というマークは、「またまた」という意味で昔の日本語の「々」と同じような意味である。これには写真 1 の「×2」と書く場合や、「②」と書く場合などがある。写真 3 の「つらい」のあとにあるみの虫のような絵は、文字を書き間違えたのでみの虫の絵を描いてかわいく誤魔化そうとしている。書き間違いを誤魔化す絵は、みの虫が一般的だが、他にも写真 4 のようなミッキーマウスのシルエットなどもある。またのぼし棒を(例: やっほーのー)を矢印で書いたり、写真 5 のように～君を～k と記したり、「？」を 2 に。をつけて書いたり(写真 6 参照)している。このように文字や絵文字、マークには個人差があり、何をかわいいとして書いているかという点で自分らしさが出る。

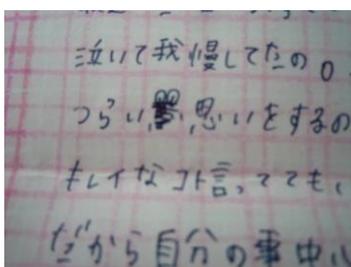
▼写真 1



▼写真 2



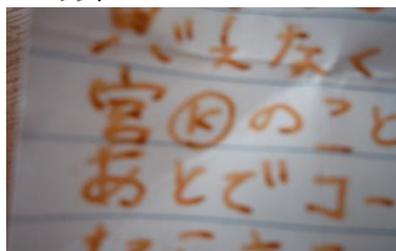
▼写真 3



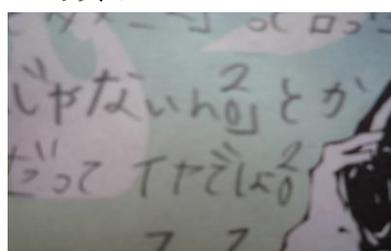
▼写真 4



▼写真 5

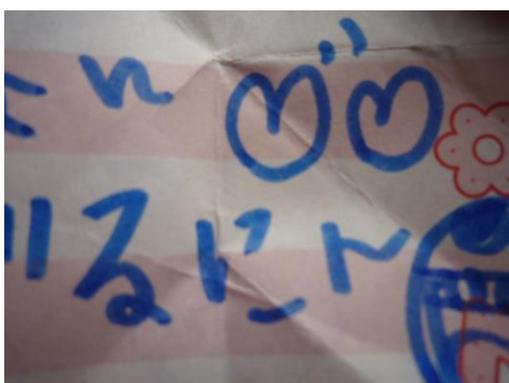


▼写真 6



次に文体である。中学生独特の文化として悪ぶるのがかっこいい、ファッションナブルだというものがある。それは女子においても例外ではなく、中学生くらいの女の子は口が悪くなったり、言葉遣いが汚くなったりする。そうして乱暴な言葉遣いをするのは彼らにとってはかっこいいことなのである。また、アニメキャラのセリフや、流行している芸人の言葉などを、手紙の中に取り入れたりすることもある。例えばアンパンマンに出てくるバイキンマンのお決まりのセリフである「バイバイキーン」を手紙の結びに「さよなら」の意味を込めて書く。ドクターランプあられちゃんの「バイチャッ」も同様である。またキテレツ大百科のコロ助の口癖をまねて文末に「なり」をつけたり、芸人が使っているということで「ありがとうございます」の意味で一時流行した「あざーす」という言葉も使ったりする。こうしてアニメキャラの言葉を真似することで「子どもらしいかわいさ」を、芸人が使っている言葉を真似することで「流行に敏感なオシャレさ」を、手紙を通して表現することができる。写真を見ると、語尾に忍者の真似であろうか、「にん」とついている。子どもっぽい言葉を語尾につけて、やんちゃな自分らしさを出しているのだろう。(写真7)

▼写真7



3つ目は手紙を書くのに使用する用紙やペンである。用紙は絵やキャラクターがプリントされたレターセットやメモ帳などである。それこそ前述したようなファンシーなものを使う。写真ではハッチポッチステーションのメモ帳や、みかんボウヤのメモ帳、またファンシーな星やハートが散りばめられたレターセットが使われている。どんな用紙に手紙を書くかという点でも自分らしさが出るものである。キティの用紙であれば女の子らしいかわいさを、またハッチポッチステーションの用紙では可愛さというより若干のクールさと茶目っ気を示そうとしているのだろう。そしてその用紙にカラフルなペンで文字を書いていく。ペンも最近ではいろいろなペンが売られており、香りがついたものからラメ入りのもの、ぷっくりとみみず腫れのように膨れるものから、書いた文字を消しゴムでこすると色が変わるものなど、多種多様なペンを少女たちは筆箱に忍ばせておき、使うのである。また敢えて素朴さを出すためにルーズリーフに鉛筆で書くこともある。女子中学生にとってはこの昔ながらの素朴ささえ「かわいい」ものであり、自分らしいセンスの表れなのであ

る。

4 つ目に折り方である。家から手紙を書いてくる場合は、レターセットの便箋に書いて、付随した封筒に入れるものもあるが、授業中や休み時間に渡す手紙は、封筒に入れず便箋を折って渡すものが多い。折り方は様々な種類がある。ただの 4 つ折りのものから、一般的な一つの対角線の角が折れた長方形のもの、それが進化したつまみを引っ張るもの、また凝ったものであればイチゴ型やハート型、牛乳ビン型など多種多様な折り方が存在する。それらは雑誌やネットなどに折り方が載っていてそこから情報を得て自分のものにしたり、友だちや姉妹の折り方を真似したりしている。それが目新しく、複雑でファッションブルなものほど少女たちの感覚では「かわいい」し、オシャレなのである。「ハート型はかわいさ」や「牛乳ビン型はユニークさ」などを表し、その折り方をする事で自分らしさを示している。

▼写真 8 左上のものが一般的な一つの対角線の角が折れた長方形、下がその裏側  
右上は裏側が進化して尖ったもの



▼写真 10 牛乳ビン(左下)とキノコ(上)  
六角形(中央下)とイチゴ型(右)

▼写真 9 右側がハート型、左はその裏側

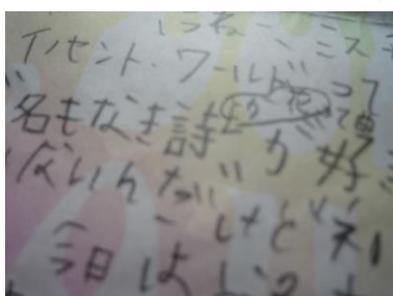


最後に、内容である。内容の例としてまず、あだ名が挙げられる。中学生のころのあだ名は、どこかユーモラスで相手の特質をぐいと一言でとらえている秀逸さがある。しかし

彼らが付けるあだ名には意外な優しさと一種残酷ともいえる面が同居しており、それが教師につけるあだ名となると、より残酷さが増す傾向にある。これは何ものかに怒りをぶつきたいという衝動があだ名という方向に鋒先を変えて、攻撃的な傾向を発揮しているものと思われる。例えば筆者自身が中学校の時の担任教師を、河童の顔に似ていることから「河童」と呼んでいた。今思うと大変失礼な話だが、「河童先生」というような攻撃的なあだ名をつけて、自分の偽悪ぶるセンスをアピールしていたのだ。同級生の間でも例えば、仲良しグループの中で名前後ろに「～たん」（例：まなたん）を付けて仲の良さをアピールする。キノコ型の髪型をした木下さんという女の子で「きのこ」と呼ばれていた子がいたが、名付け親こそ他人であったが、彼女の親しみやすい「いじられキャラ」としての独自のポジションと相まって、きのこというたった 3 文字のあだ名に「彼女らしさ」が詰まっていた。また女子中学生がアイドルやスポーツ選手に熱を上げたり同一化したりするのも自分らしさである。例えばジャニーズ事務所のアイドルにキャーキャーと騒ぎ、どんなアイドルを好んでいるかを示すことも、自分らしさを示している。さらに好きな曲の歌詞を手紙に書いて友人に紹介することや、ロマンチックなポエムを手紙に書いてその世界に酔いしれているようなことも、「〇〇を好きな自分」つまり自分らしさを示している。

以上のように手紙は文字、文体、用紙、ペンの色、折り方、また内容など、手紙の外見から文面に至るまで、「自分らしさ」を表現する手段も機会もたくさんある。つまり手紙というものは「わたしはこれかわいいと思っている」「これが私らしさ」という自分のセンスを他人に表現する絶好の道具となりうる。そしてこの自分らしさは、「私はこういうものを好きな」「私はこういうキャラクターなの」ということを表現したい願望を、手紙という手段を使って示しているのである。

▼写真 11 Mr.children の「名もなき詩」や「花」を紹介する手紙



#### ▼写真 12 DEAR のオシャレな書き方



#### 第4節 表現したいこと

前節までに見てきた手紙で表現したいことは、「人間らしさ」「かわいくあること」「自分らしさ」の3つである。「かわいくありたい」「かわいい共同体に所属したい」という女子中学生らしい願望と、「わたらしさを表現したい」という人間らしい個性を持ちたいという願望を、手紙そのもので表現している。「かわいい共同体に属したい」という「女子中学生らしさ」を示すことは、「かわいい共同体」に属することをステイタスとする女子中学生にとって、周りと同化することを示している。アイデンティティが確立していない時期の女子中学生は、周囲と同化して同じ価値観を持つ共同体に属して安心感を得たいのだろう。しかし周囲から見て「かわいい共同体」に属している同じような「みんな」に見える女子中学生ではあるが、共同体内では差異化を図ろうとしている。それが「自分らしさ」である。同じ「かわいい」「オシャレ」という価値観の中で、特にこのキャラクターが自分らしいからこのメモ帳を使い、このユニークな折り方が特に私らしいから気に入って折っている、といった「自分らしい」個性を出すのである。また「規則を破って反抗してみたい」という人間としての小さなプライドを守りたい、反抗するときのスリルやドキドキ感を楽しみたいという「人間らしさ」を、授業中に手紙を書く、渡すという行動をすることで意識的に表現している。女子中学生にとっての手紙は、中学生というアイデンティティを確立途中の時期にこれだけ多くのことを表現できる随一のものである。だから女子中学生はいそいそと手紙をしたため、手紙を通してどんどん溢れだす感情や個性を表現していくのである。

#### 第4章 実物の手紙からの考察

前章では、手紙がどんなことを表現しているのかということの説明してきた。そこで本章では、わたしたち現役大学生が中学生だった頃の、つまり2000～03年ごろ中学生であっ

た少女の手紙を実際に手に取り、その内容にも触れながら考察していく。

## 第1節 少女 S の場合

まずは現大学4年生で、2001～03年まで中学生であった S にあてた手紙から考察する。彼女は私立中学出身で、クールでリーダー的な素質を持ち、バスケット部に所属していた女性である。彼女が今も家に保存していた手紙には、同じ小学校出身で中学は離ればなれになってしまった友だちとの手紙や、同じ中学校の友達との手紙がある。今回は同じ中学校の友人からの手紙に絞って見ていく。

まず外見は、便箋と同じ柄の封筒に入っているものが多かったが、封筒に入れずに便箋を一つの対角線の角が折れた長方形に折ったり、ハート型に折ったりしているものがあった。またハート型のもは、表面を2色のペンでカラフルに彩られており、かわいさが伝わってくる。使っている紙は、ルーズリーフやメモ帳であり、ペンはラメ入りのペンやカラフルなペンが使われている。便箋のところどころにシールが貼られており、Sの周りでは文字や絵などではなく手軽にかわいさを取り入れられる方法としてシールがよく用いられていたのであろう。文字は部首とつくりが左右不均衡であったり、「ん」の山の部分を大きく膨らませて書いたり、また後悔をコーカイ、など敢えて片仮名で書かれていたりするなどしており、分量はメモ帳に10行程度書いてあるものから、ルーズリーフにびっしり書いてあるものまでである。

そして手紙の内容についてだが、恋愛の話や互いの近況を報告しあったものが目立つ。Sの思い人である相手の男子の近況をSに報告するものや、逆に自分の恋愛の状況をSに報告しているもの、また苦手な人についての愚痴などが主な内容である。これらの手紙のやり取りの中で中学生らしさが出ているのは、自分が書きたいことをすべて書いているところである。相手の悩みの相談に乗ってはいるが、結局きちんとしたアドバイスを示すことなく、いつの間にか自分自身の話に手紙の話題の流れをすり替えているのである。つまり相手の話も聞いてはいるが、それよりも自分の話をしたい、自分の話を聞いてほしいというのが全面に出ている。それはSにあてて手紙を書いた人のほとんどがそうである。写真14を見ると前半11行にSの悩みへの励ましが書いてあり、後半17行に自分の恋愛の話が書いてある。内容的にSの悩みは悪い方向に展開した直後の状況であり、返事としてはSを励ましたり、Sの話を聞いてあげたりすることがよいのだろうが、後半の内容はSの励ましに若干触れつつも自分の楽しそうな惚気とも感じられる話を延々17行書いてあるのである。Sの話を聞くこと以上に、自分の話をしたいという思いは行数に表れていると言える。

また、「ムカツク!」という言葉が多く出てくるように、中学生は多感な時期であり、特に女子は妙に喧嘩っ早くなる傾向がある。Sへの手紙に「〇〇(第三者の名前)にニラまれるの!?あゝムカツク!!まじムカツク!!1人じゃなんもできねーくせにガンとぼしてんじゃね

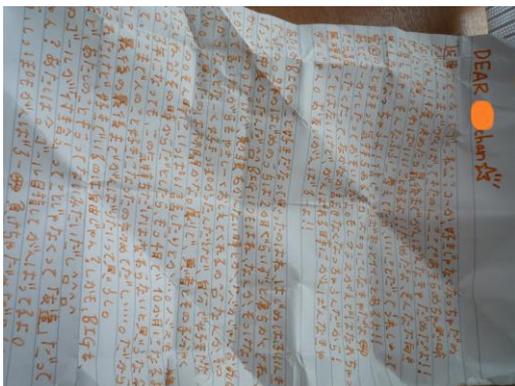
一よ（イライラマーク）」というものがあつた。本当に睨んだかは定かではないが、下手をすると目があつただけで「ガンとぼす（睨む）」と表現されることもあるため、このころの女子中学生が見ている世界は恐ろしい。また自分が直接睨まれたわけではないのに、友人の経験を自分の中に同一化して一緒になって怒ったりと、ワルぶるようになり、このように喧嘩腰の口調で他人の愚痴が書かれるのである。

さらに「私のお気に入りの詩を書くね」と、ポエムが書かれている手紙があつた(写真 15 参照)。「愛死天流 (あいしてる)」というタイトルのポエムで、内容は「愛し愛され傷ついて／信じ続けて裏切られ／それでも貴方についてゆく／それが女の愛し方」という、歌謡曲の歌詞のような昭和の哀愁漂う内容のポエムであつた。どうやら彼女はこのポエムを書くことで、恋愛に酔いしれている自分を演出しているようである。S はリーダー的な資質もあるせいか、友人たちは S を頼り、話を聞いてほしいとする内容の手紙が多かつた。

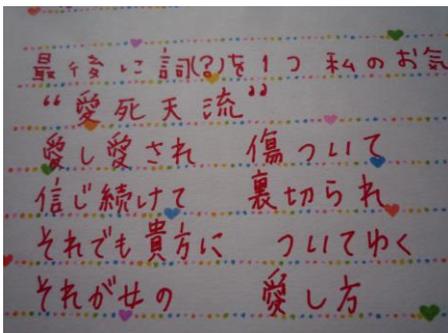
▼写真 13 ハート型の折り方もあるが、ほとんどが一般的な折り方で、レターセットもファンシー



▼写真 14 ルーズリーフにびっしり書かれた手紙



▼写真 15 恋愛に酔いしれるポエム



第2節 少女Mの場合

次に少女 M にあてた手紙を見ていく。M は現大学4年生で明るく賑やかな女性であり、中学時代は陸上部に所属しており、部活も勉強も頑張る文武両道の少女であった。この彼女が今もとっておく手紙は、先輩後輩に関わらず部活の仲間とのものが主である。大会に向けてのメッセージが書かれたような手紙は封筒に入っているものが多かったが、特別伝えたいことがあるわけではないけれど書くような手紙は、お手紙型、キノコ型、六角形などに折られていた。紙は主にメモ帳を使用し、ペンはカラフルなものを使用、中には鉛筆と色鉛筆で素朴な雰囲気を出したものもあった。文字は、崩した文字が目立ち、「お」をわざと「を」と書いたり、「じ」をわざと「ぢ」と書く、また「DEAR」をあえて日本語で「ディアー」と表記したりと、さりげなくかわいさを取り入れている。また間違えたところに、みの虫を描いてごまかす方法も複数見受けられた。分量はメモ帳数枚程度が主である。

そして手紙の内容は、対人関係の悩みや不満が書かれたものが目立つ。例えば「担任マジきもい&むかつく」と記されたように、担任教師への異常な攻撃的言動を手紙の中で示すことで、大人の支配下から抜け出したいという自立心の芽生えを感じ取れる。また、わたしでもしかして嫌われているかもしれない、実は辛くて陰で泣いて我慢してたんだ、といった友人関係の悩みを吐露しているものもあった。揺れ動く思春期特有の人間関係を、友人に手紙を通して相談し、表現していくことで精神的な安定を望んでいるのかもしれない。また部活の後輩への不満も書かれている。部活の厳しい上下関係の中で、初めて先輩という立場になり、自分より立場が明確に低いものの存在が出現したために、自分が先輩にされたように後輩への目も厳しくなり後輩の些細な言動にも不満を抱きがちになるのである。このような自分が今おかれている環境への様々な不満や愚痴を、S と伝えあうために手紙を利用していると言える。

▼写真 16 キノコ型やイチゴ型の手紙と、カラフルな封筒



第3節 少女Aの場合

最後に少女Aにあてた手紙を見ていく。Aもまた現大学4年生で、明るくさばさばとした女性で、ドンと構えた様子は「肝っ玉母さん」を思わせるような人である。中学時代は卓球部に所属、副部長を務めあげた女性である。この彼女がとっておく手紙はクラスの友人や、過去同じクラスだった友人からのものが多い。すべての手紙が封筒に入れられずに、かわいく折られた便箋だけの形であった。折り方は一般的な折り方や、それをさらにシャープに進化させた四角い折り方がほとんどである。使用している紙はキティやみかんボウヤ、ディズニーキャラのメモ帳や、ルーズリーフを半分に切って使っている。文体は、語尾にキテレッズ大百科のコロ助「なり」や忍者を真似て「にん」をつけたり、「おどろきー（ゴリエ風）」と当時流行していたお笑い芸人のギャグを使ったりするなど、アニメを真似ることで子供のようなかわいさを、流行のギャグを取り入れることで「流行へのアンテナの高さ、オシャレさ」を表現している。分量はメモ帳2枚程度からルーズリーフ半分くらいに書かれている。

内容は、Aに対する報告が主である。たとえば同じクラスの一人の女子を嫌っており、裏のあだ名をつけて、その子の一举一動をAに報告して悪口を言う手紙がある。その嫌われている女の子は同じクラスの男子にチャホヤされているらしいが、手紙の送り主であるKはそれも気に入らないのだろう。「今4組の中で一番嫌われているらしいよ」という、“みんな“まで引き合いに出して悪口を正当化しようとしている様子も見受けられる。本当はそんなに憎くないのに、男子にチャホヤされる友達を無意識にうらやましいと思っているが、それを認めたくない自分との葛藤の中で悪口という消化の仕方を見つけたKはAに手紙を書き、うまく自分の中で受け入れようとしているのだろう。このようにうまく自分の中で消化できずに、さして憎くもない人の悪口を言うことは中学生にはよくあることであり、この手紙からは中学生らしさが伺える。また授業中に書かれたと思われる手紙で「きいてよっ！選択理科も一緒なんだよ！？かわいそうだと思わない！？くわしくはのちほど

ねっ☆」というものがある。これらは今でいうツイッターのように湧き上がってきた言葉をどうしても伝えたいために手紙を利用しており、手紙は彼女たちにとって、さもそこに会話の相手である A がいるような口語体で書かれていることから分かるように、もはや会話そのものなのである。これはコミュニケーションを誰かととってほしいという願望の現われであり、感情のままに話したい、伝えたいという女性の特徴が現れているといえる。

▼写真 17 ルーズリーフに書かれている手紙



第4節 10年前の手紙のまとめ

以上のように見てきた手紙だが、どの手紙も中学生らしさ、女性らしさ、かわいくあること、人間らしさ、自分らしさと前章までに見てきたような要素が、ちりばめてある手紙であった。封筒に入れる、もしくは便箋自体を折る、また使用する紙やペンなど、何をオシャレと感じて流行するかは、中学校ごとに異なる。しかし、同じ人が書いた手紙でもルーズリーフに書かれたものとレターセットに書かれたものなど複数の種類あることから、「必ずこの紙に書く」というような決まりは特にはないものと思われる。また内容も置かれている環境によって多種多様なことが書かれている。恋愛の話や友人関係の話、また担任教師への不満など、あふれ出す感情や思いを文字にして、目に見える形で伝えようとすることで、移り変わる心の整理をして、アイデンティティを確立しようとしていることが読み取れる。実際に、実物の手紙からも前章までに見てきた「手紙を通して表現したいこと」を読み取ることができた。

しかし、置かれている環境が全く異なるこの三人の手紙に共通する点の一つがある。それは手紙のおまけとして、また時に手紙を書いた理由そのものとして「プリクラを渡す」という目的があげられることである。プリクラというのは90年代後半に登場した写真シールのことであり、女子中学生、女子高生を中心に今現在も人気を博す文化となりつつあるものである。このプリクラは、最初こそフレームを選んで顔を写すだけのものではあったが、スタンプ機能、落書き機能と写真を装飾するような機能が付き始め、最近では目をより大

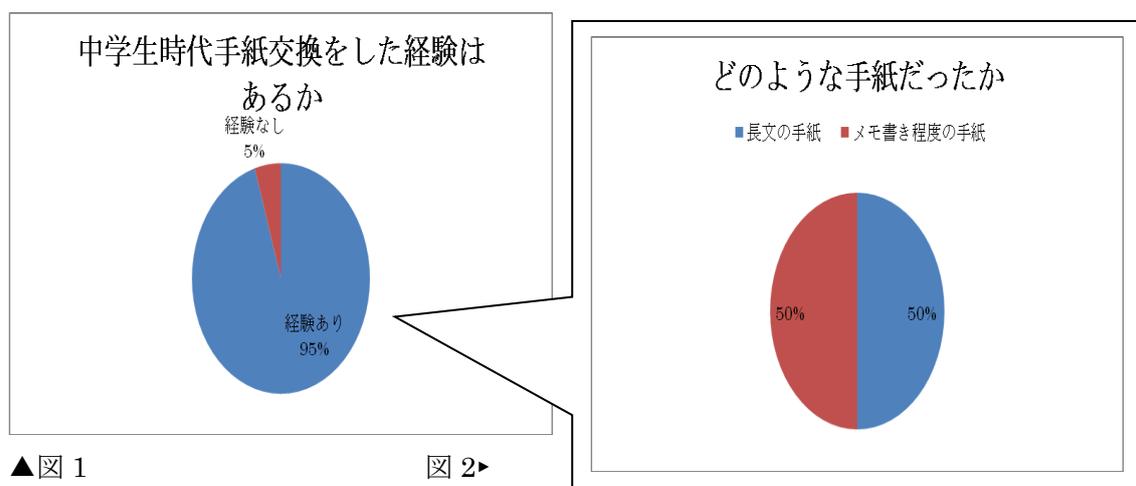
きく写す機能や髪の毛の色を変える機能まで付くようになった。よりかわいく見せるための機能が、進化してきたのである。このプリクラを友人同士で交換することは、友情の証にもなるし、互いが同じようなポーズで写真を撮ることで「かわいい」という同じ感覚を共有していることの証にもなる。またそれを“プリクラ帳”なるノートにまとめて貼り、他の友人に見せることで、プリクラを交換した相手との仲の良さを示すことができるなど、プリクラを友人同士で交換し、見せ合うことは、女子中学生のコミュニケーション・ツールの一つとなっている。また、プリクラにする落書きや、プリクラ帳制作の際には自分のセンスが問われ、「自分らしく」て、なおかつ「かわいい」落書きやプリクラ帳が望まれる。プリクラは「私はこういう子と仲が良くて、こういうポーズをかわいいと思っている、またはこういう変な顔もするような面白い人間ですよ」という、自己紹介も兼ねており、女子中学生にとっては名刺代わりのようなものなのである。このプリクラを交換するとき、手紙に添えて渡すのである。これには、きちんと報告したい内容のある手紙のおまけとして「プリクラ入れといたよ☆」と添える場合と、プリクラを渡すという目的があって、それを包むものとして手紙を利用する場合とがある。後者の場合、手紙の内容は無いに等しく、何かを伝えるという手紙の役割をもはや担っていない。しかし、手紙の内容はなくても、プリクラだけで「かわいさ」や「オシャレさ」「自分らしさ」を示せるようになったために、「女子中学生らしさ」や「かわいい共同体に属している」「自分らしさ」ということを示す方法として、プリクラが手紙と同等または手紙にとって代わるものとして台頭してきていると言える。

## 第5章 手紙文化の変化（アンケートからの考察）

前章では10年近く前に女子中学生であったものが書いた手紙を考察してきた。この10年の間に中学生への携帯電話の普及も進み、ブログやツイッターなどが流行するなど自己発信、自己表現する機会がぐっと増えてきた。そこでコミュニケーション・ツールの増加があったここ10年で、それらは手紙文化に何か影響を与えたか、また与えたとしたら「手紙」は今の中学生にとってどのような存在になってきているのか、ということ調べるために、現役女子大生と現役中学生に対してアンケートを行った。大学生へのアンケートだが、宇都宮大学の学部1年生から大学院の1年生までの女子学生42人を対象に、2010年12月3日に実施した。また中学生へのアンケートは、宇都宮市立姿川中学校に通う1年生（男子17人、女子16人）と2年生（男子14人、女子15人）を対象に、2010年11月18日に実施した。

## 第1節 女子大学生へのアンケート結果

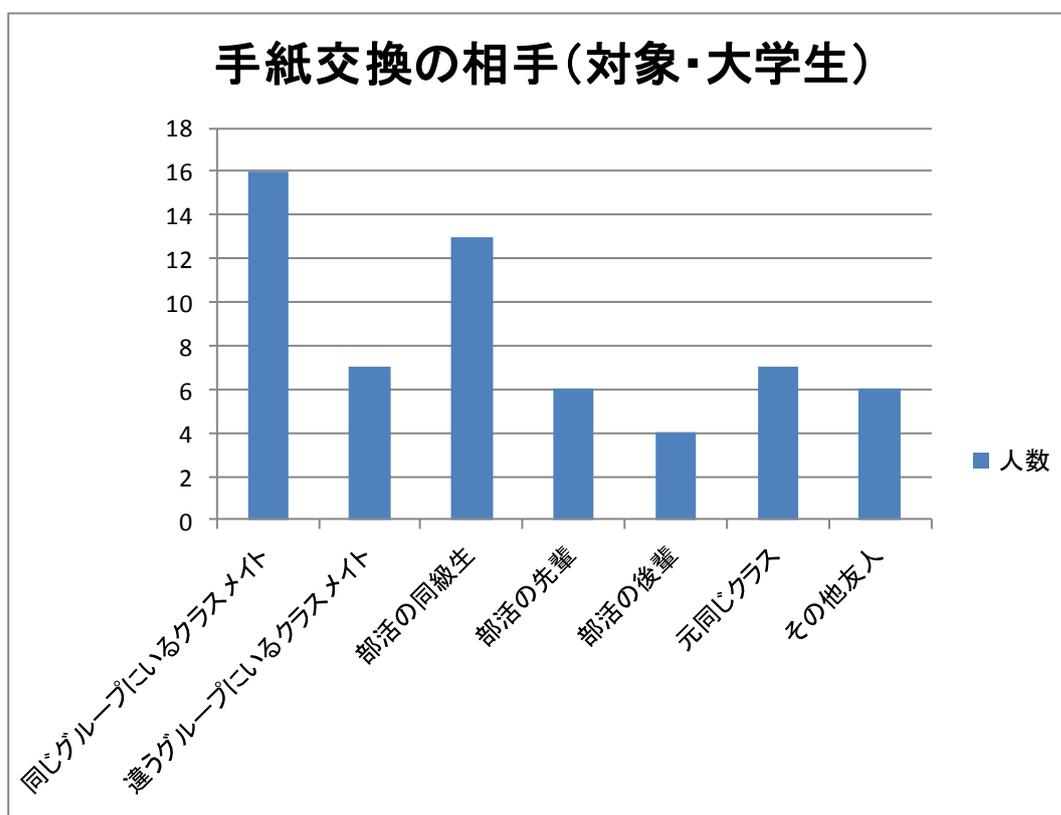
女子大学生に対するアンケートの中で「中学生の頃、友人と手紙交換をしていたか」という質問をしたところ、驚くべき結果が出た。なんと全体の95%にあたる40人の女子生徒が長文の手紙、もしくはメモ書き程度の手紙を交換していたことがあるという。うち20名がメモ書き程度の手紙、20名が長文の手紙も書いていた。長文の手紙、メモ書き程度の手紙というものをアンケート内で具体的に明示しなかったため、個人の感覚に差が出てくるかもしれないが、とにもかくにも手紙交換は女子中学生にとって、日常生活のコミュニケーション・ツールとして確固たる地位を築いていたものと思われる。



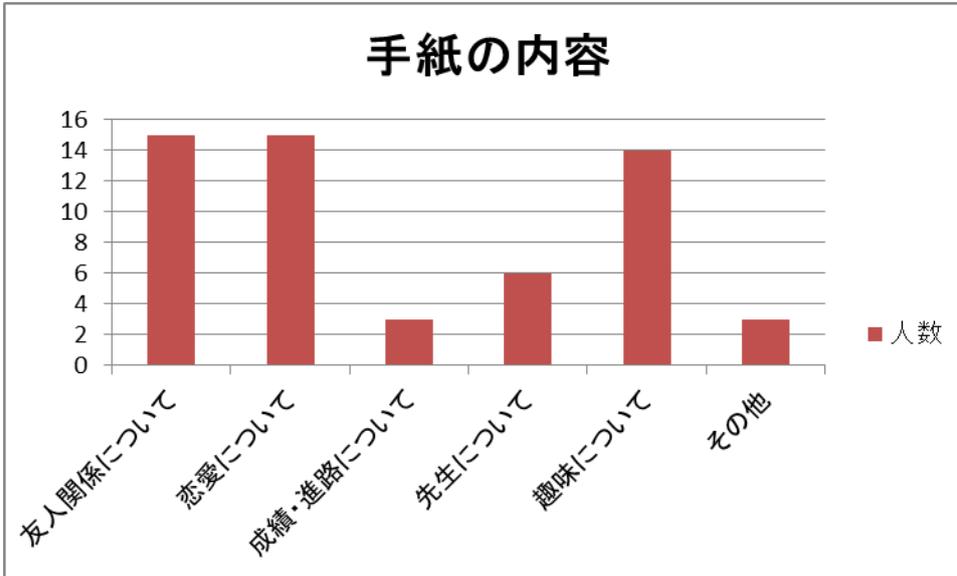
しかし学校で手紙交換をすることは認められていたかどうか、という問いに対して、42人中30人が休み時間に交換することは認められていた、8人が授業中も休み時間も手紙交換は禁止されていたとされるのだから、禁を破っても手紙をこっそりしたため、やりとりをしていたことが想像できる。またどんな人と手紙を交換していたかという問い（複数回答可）には、長文の手紙を書いていた者の中では20人中16人が、同じクラスと同じグループの人と、次いで13人が部活の同級生と、7人が同じクラスの違うグループの人とやり取りをしており、主に日常生活も共にしていながら同時進行で手紙の中でも友情を深めあっているようである（図3参照）。そして手紙交換をしていた相手の人数は、長文の手紙をしていた者で平均5~6人で、やり取りの頻度は1日平均4回であった。そして内容はどのようなものだったかという問い（複数回答可）では20人中15人が友人関係、恋愛の話と答え、次いで14人が趣味と答えた（図4参照）。中学生にとって、学校生活の中で重きを置き、アイデンティティが確立していない段階で悩みの種となるのは、やはり同性異性に関わらず人間関係なのである。それを1日4回書くほど目まぐるしいペースで、かつての女子中学生は友人に手紙を通して悩みや思ったことを打ち明けていたのである。加えて、自分が手紙を書くときにこだわっていたことはありますか、という問いに対して、紙はキャラクターのメモ用紙、ルーズリーフを使う、ペンは緑か青のペンで書いた上に蛍光ペンで文字をなぞる、タギング文字を使う、折り方は牛乳ビン型、イチゴ型、ハート型にする、

ハートや音符、キラキラのマークをたくさん使う、Dear や From をかわいくアレンジする、などの意見が出た。タギング文字とは、もともとは米国のカリフォルニア州サンディエゴのインペリアルビーチから発祥した文化で、街の彼方此方に散見されるスプレーペンキで描かれた落書きの一種で、例としてシャッターに装飾されたタギング風のロゴやストリートアート、暴走族らによる乱雑な難読漢字を用いた当て字メッセージなどがある。この場合の女子中学生が使うタギング文字は、アート風の変形した文字のことを指しているといえる。前章で 3 人の女性の実物の手紙を見てきたが、文字の書き方や、折り方、内容などの特徴がほとんど一致するため、2000 年～2005 年の中学生にとっての「手紙」の概念は、その時期のほとんどの女子中学生に共通したものであると言える。

▼図 3



▼図 4



## 第2節 中学生へのアンケート結果

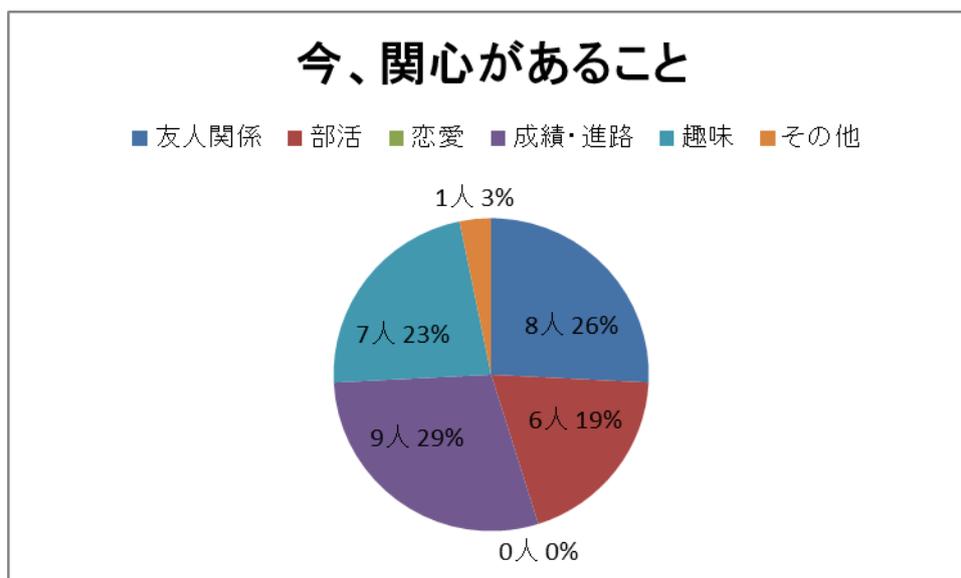
現役中学生にとって手紙とはどういうものなのか。まず手紙交換を行ったことがあるかという質問に対して、あると答えたものが中学2年生の女子で15人中4人、1年生の女子で16人中9人という結果になった。手紙交換の経験があると答えた者には続けて質問をしたところ、手紙の交換相手は普段同じグループにいるクラスメイトが多く、次いで部活の同級生が多かった。頻度は週に2~3回程度から1日7~8回やり取りをするものもいた。手紙の紙やペン、折り方についてのこだわりを持つものはほとんどおらず、分量はメモ帳1枚のものからメモ帳4~5枚、ルーズリーフ2枚にわたってかくものまでいた。内容はクラスの友人関係、部活の友人関係、恋愛について、を選択したものが多かった。このように見てみると手紙に対するこだわりがない、という点以外は大学生が中学生だった頃の手紙に関する質問とそれほど大差はない。しかしやはり、手紙交換を行っている者の全体数が、大学生のアンケートと比較すると圧倒的に少ないことが分かる。アンケートを実施した中学校では「手紙は授業中も休み時間も書いて交換してはいけない」というルールがあったため、このように手紙を交換する者も少ないのかもしれない。だが、前節の大学生へのアンケート結果と比べると、急激に手紙交換をする人口が減っていると言える。

では現役中学生は、かつての手紙にとって代わる他のコミュニケーション手段を持っているのだろうか。交換日記を行っているかという質問に対して中学2年女子で3人、中学1年女子で6人が行っていると答え、携帯電話を持っているか、という質問に対しては中学2年女子で6人、中学1年女子で7人が持っていると答えた。交換日記という古典的なコミ

コミュニケーション・ツールは相変わらず安定して存在してはいるが手紙を脅かすほどではなく、携帯電話という新しいコミュニケーション・ツールは中学生の中ではそれほど浸透しておらず、これも手紙文化を脅かすほどではない。さらに友人とよく長電話をしますか、という質問に対してはいと答えた中学2年女子が3人、中学1年女子が4人おり、通話時間を尋ねると1年生は40分から120分とごく一般的に「長電話」と称される時間だったのに対し、2年生は10分から30分と「長電話」とは言わないのではないかと、という短い通話時間でのコミュニケーションであった。加えて今の生活の中で最も関心があることは何か、という質問をしたところ、中学2年の女子で7人が成績・進路と答え、趣味、友人関係がそれぞれ3人ずつ、部活が1人であった。中学1年女子は友人関係と部活がそれぞれ5人ずつ、趣味が4人で、2人が進路と答えた（1年2年合わせた結果：図5参照）。NHKによる調査（2002年実施・対象は全国292人の女子中学生）で、今どんなことに関心があるかという質問をしたところ、65%の中学生が「友だち付き合い」を挙げ、2位の「音楽（47%）」、3位の「将来のこと（46%）」を、大きく突き放していた。前節での手紙の内容が、ほとんど恋愛や友人関係などの人間関係、友だち付き合いに集中していたことから考えても、今回の中学生へのアンケート結果、特に中学2年生の結果は予想外であった。

このアンケート結果から今の中学生は、手紙に限らず友人とのコミュニケーションを取らなくなってきている、また友人関係そのものにもさほど興味関心がなくなってきており、友人との関係よりも自分の成績進路のほうに関心が向くような真面目な中学生になってきた、と捉える事ができる。

▼図5



### 第3節 最近10年間の手紙文化の変化

大学生へのアンケートと、現役中学生へのアンケートの結果を比較すると、昔よりも友人同士のコミュニケーションとしての手紙交換の頻度が減ってきていることがわかる。原因として携帯電話が普及し、コミュニケーション・ツールが手紙というアナログなものから、Eメールやネット上の掲示板やブログなど、ハイテクなものへと進化しているからかと考えることができる。しかし中学生へのアンケート結果から、それほど携帯電話が中学生には浸透していないので、この説は妥当ではないと言える。またアンケート結果から今の中学生が昔よりも人間関係に淡白で、より真面目になってきた印象を受けた。中学生がより真面目になってきたことを示す資料として2つのものが挙げられる。

一つ目は、学校教育方針がゆとり教育から脱ゆとりへと転換したことが考えられる。筆者も含め2000年から2005年頃に中学生であった今の女子大生は、ちょうど2002年施行の新学習指導要領が適用された学年である。この2002年の学習指導要領は、総合的な学習の時間を取り入れ、学習内容を大幅に削り、週休完全2日制を定着させるなど「豊かな心、健やかな体、確かな学力」を基本とする「生きる力」を育むためのいわゆる「ゆとり教育」を行うものであった。1998年に告示された学習指導要領の移行措置が進む過程で、新しい学習指導要領に基づく教育では子どもたちの学力低下を招くのではないかとの批判が起こった。そこで文部科学省は、学習指導要領の完全実施の直前に『学びのすすめ』を発表して、「確かな学力」の向上を目指す姿勢を打ち出した。学習指導要領の示す内容をより深める「発展的な学習」を扱うことが認められたり、基礎・基本の確実な定着を目指す指導や学ぶ習慣を身につけるような指導機会の充実が求められたりするようになった。しかし実際、2003年に行われた経済協力開発機構(OECD)の学習到達度調査(PISA)で、日本の学力が大きく落ちてきていることが分かるのである。2000年の第1回調査に比べて2003年の第2回調査では、読解力が8位から14位に、数学的応用力が1位から6位に、それぞれ順位を下げた。このように目に見える形で、ゆとり教育の課題である学力低下が示されてしまったため、ゆとり教育という路線を本格的に軌道修正し始めた。それからは全国学力テストを復活させ、2011年度から実施される新学習指導要領も学習内容を大幅に増やすなど、学力重視の傾向が強まってきた。そして2009年に行われた第4回PISAでは、読解力が第3回の15位から8位へ、数学的応用力が第3回の10位から9位へ、科学的応用力が第3回の6位から5位へと、順位を上げたのである。このように学校現場での教育が、筆者を含め今の大学生が中学生だった頃に比べて現在の方が、勉強内容も増えて学力重視の雰囲気が高まってきており、昔よりまじめ志向になっているのかもしれない。

二つ目は学習時間の増加である。全国3地域の中学2年生2500名程度を対象に行った、ベネッセ教育研究開発センターの調査によると、家庭学習の頻度について、ほとんど毎日する、また週に半分以上はすると答えた中学生は、2001年に行われた第3回目の調査時に

は 39.8%だったものが、2006 年の第 4 回目の調査時には 51%に増えている。内訳としては、ほとんど毎日勉強するとしたものが 2001 年から 2006 年で 9.8%も増えているのである。また授業の受け方に関する質問で、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」ことが「よくある」または「時々ある」と答えた者は、28.3%から 35.4%に増えた。一方で、「ぼうっと他のことを考えている」ことが「よくある」または「時々ある」と答えた者は、61.0%から 55.3%に減っている。このように、家庭での学習時間が増加したことや、授業に取り組む姿勢がよくなってきていることから今の中学生は、現在大学生となった者が中学生だった頃に比べて、より真面目に、より勤勉になっていると言える。

かつての女子中学生が家で手紙を書いたり、電話したりと友人とのコミュニケーションに割いていた時間を、今の中学生は勉強時間として使っているのかもしれない。手紙交換の文化が衰退し、勉強に意欲的に取り組む姿勢を持つ今の中学生からは、友人よりも将来の自分を優先するような、淡泊な人間関係という印象を受ける。またより真面目になってきたことで「規則を守る、ルールを守る」ことが当たり前になってきており、無駄な反抗はしないほうがいい、という考え方になってきているのかもしれない。そして、かわいくあることや中学生らしくあることなどを、昔よりも追求しなくなってきているのかもしれない。

## 第 6 章 本研究を通して (考察)

今まで見てきたように、女子中学生のときに何気なく交換していた手紙は、さまざまな要素を持っている。中学生らしい心の大きな揺れ動きを、誰かに伝えたくて手紙を利用することもあれば、反抗期真っ只中のために、授業中も先生に背いて手紙を回したい、ただただお喋りしたいという反抗の意思を示すのにも利用される。手紙の内容で自分の心の中を表現することもあれば、手紙を渡すことそれ自体に表現したいことが詰まっていることもある。もちろん一つ一つを見ていけば、紙やペン、言葉を伝えるための文字、感情をより豊かに伝えるための絵文字、手紙の折り方や渡し方にいたるまで「手紙交換」というものを構成するさまざまな媒介を通して、感情のままに表現したいという欲求や、自分らしさを表現したい、おしゃべりし続けたい、かわいく見られたい、オシャレに思われたい、反抗しているかっこいい子と思われたい、などのさまざまな欲求を表現し満たそうとしている。女子中学生にとって手紙とは、単なるコミュニケーション手段ではなく、意識しているか否かに関わらず、心のより深い部分を表現するものであり、自分が意識している部分では受け止めきれない感情を随時表現し、一つ一つ整理していくための手段なのである。そして相手が手紙を読み、自分を受け入れ、認め、手紙の送り手を励まし、意見を出すことで、互いに認め合う友情を深め合っていく。

このように女子中学生にとって誰もが通る道といっても過言ではなかった「手紙交換」

の文化が、最近では徐々に衰退してきている。友人とのコミュニケーションに割いていた時間を、勉強に充てているのか、皆まじめになってきている。手紙のやりとりが減少しただけで人間関係が希薄になっているとは考え難いが、かつて「手紙」が友人とのコミュニケーションにおいて重要な位置を占めていたところから考えると、今の中学生は友人同士で互いにそれほど干渉しなくなっているのかもしれない。だがそれでも少数派となってしまっているが、女子中学生の間で手紙文化は未だに存在している。中学生くらいの少女たちはどんな時代であっても、おしゃべりとかわいいものが大好きで、感受性豊かで、自分らしさを見つけていこうとする年頃なのである。学校という規則に縛られるような場所に13～15歳の少女が存在し続ける限り、手紙文化はこれからもあり続けるだろう。

終わりに

本研究を始めるにあたって、自分の中学生時代の手紙を読み返すことにした。カラフルな色のペンで彩られた手紙には、中学生の頃仲の良かった友人たちからのメッセージが記されており、本当に小さなことでくよくよと悩む自分が浮かんできた。女子にとって、中学生時代の手紙とは、青春の証である。くよくよと悩んだことも、先生や先輩、親に反抗したことも、自分に酔いしれた言葉を手紙に綴ったことも、どれも全部、大人になりたくて背伸びをしたかった私たちが精一杯考えて行動したことなのである。それが例え、今思い出すと「なぜあんなことをしたのだろう」と理解に苦しむことだとしても、恥ずかしくて赤面してしまうようなことだとしても、中学生時代の私たちは、一生懸命行動していた。手紙は中学生の友人関係において無くてはならないものであったと思うし、後から読み返しても自分の成長を感じることができる貴重なものである。真面目に勉強に取り組んだり、塾に通ったりすることも大切かもしれない。しかし私は、不思議な無謀さがある、自分に酔いしれている時期といえる中学生だからこそ、その時期にしかできないようなことをやっておくべきだと思う。友人との秘密の共有や、よりかわいい手紙の創作、授業中に手紙を回すスリル感は、大人になってからやったのでは遅い。例え後で恥ずかしいと思う日が来るとしても、今の女子中学生には手紙交換を通して、もっと友人との関係を密にして、悩みを相談しあい、今しかない青春を謳歌してほしい。

参考文献

Erving.Goffman 1984 (訳・石黒毅) 『アサイラム - 施設被収容者の日常世界 - 』 誠信書房

井上輝子 江原由美子 2005 『女性のデータブック[第4版]』 有斐閣

今田絵里香 2007 『少女の社会史』 勁草書房

NHK 放送文化研究所編 2003 『NHK 中学生・高校生の生活と意識調査ー楽しい今と不確かな未来ー』 NHK 出版

大塚英志 1989 『少女民俗学 - 世紀末の神話をつむぐ「巫女の末裔」 - 』 光文社

門脇厚司 宮台真司編 1995 『「異界」を生きる少年少女』 東洋館出版社

田中富久子 2004 『脳の進化学 男女の脳はなぜ違うのか』 中央公論新社

坂東昌子 功刀由紀子 1997 『性差の科学』 ドメス出版

本田和子 1996 『交換日記 - 少女たちの秘密のプレイランド - 』 岩波書店

宮台真司 2006 『制服少女たちの選択』 朝日文庫

宮台真司 石原英樹 大塚明子 1993 『サブカルチャー神話解体』 PARCO

村瀬孝雄 1984 『中学生の心とからだ - 思春期の危機をさぐる - 』 岩波書店

山根一眞 1993 「変体少女文字の研究」 柳田邦男編 『同時代ノンフィクション選集 日本人の変容』 文藝春秋

山根一眞 1991 『「ギャル」の構造』 世界文化社

弥生美術館 内田静枝 2005 『女學生手帖 大正・昭和乙女らいふ』 河出書房新社

Benesse 教育研究開発センターホームページ

<http://benesse.jp/berd/>

OECD 生徒の学習到達度調査 ～2009 年調査国際結果の要約～ ホームページ

[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/data/pisa/index.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/data/pisa/index.htm)